
竜の住む谷間

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の住む谷間

【Nコード】

N1388A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

竜使いの兄・ラルフに憧れていた、幼い日のセレム少年。自分を守るうとして亡くなった兄に責任を感じ、心を閉ざすようになる。兄に期待をかけていた両親との関係も上手くいかない。そんなある日、竜の谷間に住む竜使いの人々と出会う…

ブログ（前書き）

新作投稿します。

「魔法」の次は「竜」です。ファンタジーの王道を行います。（＾
＾；）マイペースで投稿していきますが、今回も愛読していただければ嬉しいです。

プロローグ

「ぼくも竜使いになりたいな。竜と友だちになって、空を飛びたい」
まどろみの中で、セレムはまた同じ夢を見ていた。小さな自分が
見上げた先には、いつも優しい微笑みを浮かべた兄、ラルフの姿が
あった。

「ぼくもなれる？ラルフみたいな竜使いになれる？」

「きつとなれるよ」

つきまとう小さな弟を嫌がりもしないで、ラルフはいつも面倒を
見てくれた。

「いつなれる？」

「僕と同じ年になったらね」

ラルフは笑顔で答える。その横には優しい目をした竜のコーリー
がいた。大きくて温かくてその背中の上でいくら飛び跳ねて遊んで
も怒らず、じっとしてセレムのお守りをしてくれた雌の竜。

「あとどれくらい？」

「セレムは3才だから、後10年。13才になったらなれるよ」

そう言って、ちっちゃなセレムを抱き上げてコーリーの背中に乗
せてくれた。コーリーは優しい目。その目に見守られながら柔らか
な背中では眠り込む。

13才……

カランツというカウベルの音が小さく聞こえ、セレムは目を覚ま
した。牛達に草を食べらせている間、木陰で休みいつの間にか眠っ
ていた。午後の日差しは大分傾きかけ、牛達もお腹いっぱい草を食
べたようだ。

セレムは立ち上がった。木陰を吹き抜ける風が、セレムの金色の
髪をサラサラとまでていく。まだ華奢な少年の体つきだが、背はあ
の頃の兄と変わらないくらい伸びた。13才。今日でセレムも兄
と同じ13になる。永遠に13才のままの兄、ラルフ。

月日の流れは、無邪気でやんちゃだったセレムから、明るい笑顔を消していった。

プロローグ（後書き）

読んで下さってありがとうございます。また、長い旅路になるかもしれませんが、最後までお付き合い下さいませ。宜しく願います。（＾－＾）

兄の墓

「セレムー！セレムー！」

セレムを呼ぶ声がこだまして、草原の向こうから長い髪を三つ編みに束ねた少女が、息を切らせながら駆けてくるのが見えた。両手に大きな花束を抱えている。セレムは無表情に突っ立ったまま、少女が来るのを待った。

「母さんとお花畑でいっぱい花を摘んできたの」

道の向こうから、ロバをひいた少女の母がゆつくりと歩いて来る。ロバの背には、籠いっぱい色とりどりの花が摘まれていた。

「明日、街に売りに行くわ。はい、これはセレムに！」

少女は笑顔いっぱい、花束をセレムに差し出した。

「お誕生日おめでとう！」

「…ありがとう」

花束を受け取り、セレムはぼそつと呟く。

「アンナ！何してるの、帰るよ！」

道の向こうで、母親が叫ぶ。

「じゃあ、またね！」

アンナはセレムに手を振ると、また急いで元来た道を駆けていった。幼なじみのアンナは、セレムの唯一の友だちだ。アンナだけは、セレムに優しくかった。明るいアンナ、その明るさは、時としてセレムの心をかき乱す。

「ラルフ兄さんと同じ年…」

セレムは花束を抱え、牛達のいる場所とは反対の方へと向かった。

草原を見渡すならかな丘の上に、小さな村の小さな共同墓地がある。古い時代の石碑もあれば、最近作ったばかりの石碑もあった。一つ一つの石碑が、それぞれの人生を刻んでいた。

セレムは、墓地中央の比較的新しい石碑の前で立ち止まる。墓に

はまだ新しい花束が置かれていた。毎日のように両親が訪れるため、墓に花束がとぎれることはなかった。セレムは貰ったばかりの大きな花束を、そつと花の横に供えた。

「ラルフ、今日で同じ年になったよ。今までずっと僕の兄さんだったけど、今日からは段々僕の方が年上になっていくんだね。なんか変な感じだな…」

普段、無口なセレムだが、ラルフの墓の前では雄弁になる。心の内を話せるのは、ラルフだけだった。

「僕が覚えているラルフ兄さんは、すごく背が高くて大人に見えた。何でも知っていて、頼りがいがあった。でも、本当はまだ子供だったんだよね。ラルフだって恐かったんだ。僕のために死ぬのは早すぎる…」

ラルフの命の時間が止まって以来、セレムと両親の時も一緒に止まってしまったようだ。家族に暗い影を落としたまま、何もかもが止まってしまった。

あれから、セレムは心の扉を閉じて、しっかりと鍵をかけてしまった。

兄の墓（後書き）

読んで下さってありがとうございます！
暗い気分で始まりましたが、これから登場人物も増えていき段々と明るくなっていく予定です。ぼちぼちと進めて行きます。軽い気持ちで読んで下さいね。

誕生日の夜

「牛をほったらかして、どこに行っていたの？」

日が暮れて帰ってきたセLEMに、夕食の支度をしていた母親のメーシーは問いかける。

「父さんが行かなきゃ、牛たちは戻って来られなかったわよ」

「……」

「セLEMにはまだ無理だったんだよ。頼んだのが間違いだったな」

黙ったままのセLEMに、父親のウィルが答える。優しい口調だが、諦めの気持ちが込められている。

「でも、ラルフはちゃんと牛の世話をしていたわ。竜の世話だって……」

空気が重くなる。ラルフの話になると、いつも気まずい沈黙が流れる。十年の時間が流れても、両親の心の中にはまだ少年のままのラルフが生き続けている。

「……ごめんなさい」

セLEMは謝るしかなかった。

「……ま、次からは気をつけるんだな。さ、座って食事しよう。今日はお前の誕生日だろう」

両親は一応セLEMの誕生日を覚えていた。今夜の夕食はいつもより豪華だし、ちゃんとケーキも作ってくれていた。兄のラルフと同じ年になったことも、分かっているのだろうか？

セLEMはテーブルにつく。結局、セLEMがどこに行っていたのかは話さなかった。両親にはさほど関心のないことなのだろう。今夜もいつもと同じ静かな食事が始まった。

早々と夕食を切り上げて、セLEMは部屋に戻ってきた。昔、ラルフが使っていた部屋をそのままセLEMに受け渡された。ラルフが使っていたベッド、ラルフが使っていた机、椅子……。13才のままの

ラルフが、まだこの部屋で生活しているようだ。

セレムは机の引き出しを開け、中から横笛を取り出すと、ベッドに腰を下ろした。ラルフの横笛。昔、ラルフが手作りした横笛は、今ではセレムの大切な宝物となった。ラルフはいつも横笛を持ち歩いて、暇さえあれば笛を吹いていた。

セレムは横笛に唇をあてて吹いてみる。見よう見まねでなんとか音は出るようになったが、曲を演奏するまでにはなっていない。

「ラルフに横笛習いたかったな…」

幼いセレムはラルフの真似をして笛を吹きたがったが、3才ではラルフの笛を吹くのは無理だった。

ふと、窓の外に稲光が光り、遠くでゴロゴロという雷の音がした。どうやら雨になりそうだ。横笛を握ったセレムの手が震えた。嵐は嫌いだ。また、鋭く外が光り、前より大きな雷の音がした。セレムは両耳を押さえ、ベッドに横になった。

雷は恐い。また、悪夢を見そうな予感に、セレムは恐ろしさで震える。

二匹の竜

雷と雨は一晩中続いた。結局セレムは明け方近くまで眠ることが出来なかった。忘れてくても忘れられない過去の恐怖。ラルフが亡くなった時も激しい雨と雷が鳴り続けていた。あの時以来、セレムにとって嵐は忌まわしい存在となった。

耳をつんざく雷鳴、叩きつけるような大粒の雨、竜のいななき、ラルフの苦しい顔！鮮明な映像がぐるぐると夢の中に表れ、セレムは悲鳴を上げて飛び起きた。

既に夜が明けて嵐は去り、雨もあがっている。セレムは深呼吸し、額に浮かんだ汗を手で拭った。心臓はまだドキドキと高鳴っている。セレムはベッドから起きあがり、カーテンを開けた。朝の光が部屋に射し込んでくる。昨夜の嵐が嘘のようだった。窓を開いて空を見上げてみると、雲の浮かぶ空にうつすらと虹が架かっていた。穏やかな景色に、セレムの心は次第に落ち着きを取り戻してくる。

「あつ？…」

空を見ていたセレムは小さく驚きの声を上げる。虹の浮かんだ空に二つの影が浮かんでいた。二つの影は羽ばたきながら、段々と近づいて来る。大きくなった影は、二匹の竜だった。竜の上には一人ずつ人が乗っているようだ。竜達はゆっくりとセレムの家の上空を通り過ぎて行った。

山の向こうの谷に住んでいるという、竜使いの人々と竜なのだろう。今は村まで降りてくることはあまりないが、ラルフは時々谷間まで出かけていたらしい。はっきりとは覚えていないセレムだが、何度かラルフと一緒に谷間に行ったことがある。

竜の飛んでいった空をぼんやりと眺めていると、アンナの声が聞こえてきた。

「セレムー！」

昨日と同じように、アンナは息を切らせながら元気に駆けってくる。

「おはよう！ねえ見た、竜が村にやって来たわ」

アンナはセレムの部屋の窓まで来ると、笑顔を浮かべて言った。

「うん」セレムは短く答える。

「見に行きましょうよ！教会の裏の広場に行ったらしいわ。母さんも行っていいって言ったから。きっと谷間の珍しい食べ物を売りに来たんだわ」

セレムが断る理由もなく、アンナは今にもセレムの手を引いて連れて行きそうな勢いだった。

「うん、今着替える」

満面に笑みを浮かべてじっとセレムを見つめるアンナの顔の前で、セレムはカーテンを引いた。

二匹の竜（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
 ちよつとずつ書き進んでいます。（^^^）ちまちまと書いていきます。よろしく。

双子の竜使い

小さな村の中心である教会近くは、商店街や宿屋もあり唯一活気のある場所だった。セレムとアンナが教会裏の広場に着いた頃には、人だかりも出来て人々で賑わっていた。

「見て、見て！大きな竜！私、竜を見るの初めてよ」

アンナはセレムの手を引っ張りながら、竜のいる広場に足早に歩いていく。

「……」

セレムが竜を見るのも久しぶりのことだった。ラルフの竜コーリ―は、優しい目をした雌の竜。薄緑色の柔らかく温かい体をしていた。

今、セレムの目の前には、薄い灰色をした竜と薄いクリーム色の二匹の竜がいる。コーリ―よりは小さい気がする。二匹とも羽をたたんで大人しく佇んでいた。

「向こうで男の子と女の子が何か売ってるわ！」

アンナは竜より竜使いの運んできた品物に興味があり、人だかりの方へと駆けていった。セレムは無言でアンナを見送り、二匹の竜達の方へと近づいて行った。頭を垂れてじっとしていた竜は、人の気配に気づき頭を上げる。

コーリ―と同じ優しい目をした竜達。竜達は小さくいなくなくと、じつとセレムを見つめている。セレムの口元は自然に弛んでいた。

「コーリ―みたいだ」

セレムは竜のすぐ側まで歩いて行って、クリーム色した竜の背中をそつとなでた。竜はセレムを嫌がりもせず、つぶらな瞳を瞬かせ。懐かしい竜の匂い。温かな体。いつの間にか、セレムは竜の背に顔を埋めて目を瞑っていた。

「竜が好きなの？」

突然、甲高い声がし、セレムははっとして顔を上げる。少し癖の

ある栗色の長い髪を一つに束ねた竜使いが、セラムに笑顔を向けていた。年はセラムとあまり変わらないように見える。

「この子はルピィ、あっちのグレーの子がレピィ」

そう言つて竜使いはバケツに汲んだ水を竜達に差し出した。二匹の竜はバケツに顔をつけながら、美味しそうに水を飲み始める。セラムはまたコーリーのことを思い出す。コーリーもラルフが持ってきた餌や水を、美味しそうに食べたり飲んだりしていた。

「後で竜に乗ってみる？」

熱心に竜を見ているセラムに、竜使いの子は親しげに話しかける。
「……」

セラムが戸惑っていると、アンナが走つて戻つて来た。アンナはいつも走っている。アンナは竜使いを一瞥すると、セラムの腕をとつて引き寄せた。

「セラム、向こうに行きましょう、珍しい果物がたくさんあつたわ」
「でも……」

セラムは竜と竜使いが気になる。アンナはセラムに微笑みかけている竜使いを睨んだ。他の少女がセラムと仲良くするのは大いに気になる。特に美少女なら尚更。

「あんだ、向こうで果物を売ってる男の子の妹なの？顔がよく似てるわね」

アンナが目を向けた先には、栗色の短い髪をしたもう一人の竜使いが、皆の前で商売をしていた。手際よく品物を売りさばいている。「うーん、きょうだいなのは確か。双子だから。でも、向こうにいるのは姉のレナで、僕は弟のギルだよ」

「あんだ男なの？……」

言葉に詰まつたアンナを見て、ギルは明るく笑つた。

赤い果実

「よく間違えられるから平気だよ」

ギルはばつが悪そうなアンナに言った。

「コルバじいさんやシンにもよく言われるよ。お前達は反対の性別だったら良かったのにつて」

「誰？知らない人ばかり」

「竜の谷の仲間。僕達と一緒に住んでるんだ」

「竜の谷…」

セラムは口を開く。ラルフも時々行っていた竜の住む谷間。村からはかなり遠い所だが、竜で飛んでいけばすぐに行ける場所だった。「ギル！何やってんだよ！この村は早めに切り上げて、隣の町に行くよ」

村人相手に商売をしていたレナが、野菜や果物の入った籠を抱えてやって来る。

「レナには男みたいだって言わないで」

ギルは人差し指を口にあてて、セラムとアンナに囁いた。

「竜が水を飲んだら行こう。ここは人が少ないから立ち寄りなくても良かったんだよ」

レナはそう言いながら、レピイというグレーの竜に籠を乗せた。

「待って、私まだ買ってない」

籠の果物を見ながらアンナが言う。

「もうおしまい。今日はあと三つも町を回る予定だから、またにして」

アンナをちらりと見て冷たく言い放つレナに、アンナは力チンとくる。

「いいじゃない、まだたくさん残ってるんだから」

「ダメだって言ってるだろ。ほんとはこんな小さな村に寄るつもりなかったんだからね」

「あなたって見た目だけじゃなくて、中身も男みたいだわ！」

「……！」

レナは竜に籠をくりつけ手止めて固まる。

「あゝ、もう一回水汲んでくるよ……」

険悪ムードが高まる中、ギルは飲みかけの竜のバケツを慌てて持ち上げた。

「ポームだ」

我関せずと突っ立っていたセLEMが、突然口を開く。不意をつかれて他の三人がセLEMに注目する中、セLEMは竜の背中の籠から赤い果物を手に取った。リンゴに似た、赤く丸い果物。遠い昔、セLEMも食べた記憶がある。

甘く懐かしい香りに、セLEMは思わずポームを口に運び一口かじった。

「あつ……ちよつと何すんだよ、売り物に！」

レナの怒鳴り声も気にせず、セLEMは黙々とポームを食べる。

「私も一個もらうわ」

アンナは笑って籠からもう一つポームを取り出し、セLEMの真似をして頬張った。

「……お金はちゃんと払いなよ」

美味しそうにポームを食べる二人を見ながら、レナは軽いため息をついた。

「君、名前はなんていうの？ポームのことを知ってるなんて珍しいね」

ギルは竜のバケツを下ろして、セLEMに話しかける。

「ポームは竜の谷でもあまり採れないんだよ」

「……」

セLEMは食べかけの赤いポームを見つめた。よく覚えていないが、きっとラルフが竜の谷で採ってきてくれたに違いない。

「彼はセLEM、私はアンナよ。私たち幼なじみでとっても仲が良いの」

セレムの代わりにアンナが答える。それを見て、レナは鼻で笑った。

「あんたは自分の名前も言えないの？まるで、アンナって子の人形みたいだね」

「何よ！セレムは大人しいだけじゃない！」

カツとなったアンナはレナに詰め寄る。

「…ポームはきっとラルフ兄さんが採ってきてくれたんだ。ラルフが竜の谷で見つけてくれた…」

「？……」

独り言のように呟くセレムを、レナとギルは不思議そうに見つめた。

思慕

「あんたの兄さんって竜の谷に来たことあんの？」

「うん…」

セレムはレナの質問に短く答え、食べかけのポームをかじった。

「どうやって？竜の谷間は道のない険しいとこだよ。人は近づけやしないんだからね」「竜がいたから…」

「竜！？」

レナとギルは驚いて同時に声を上げた。

「君も竜と住んでるの？どんな竜？この近くに竜が住んでるなんて知らなかった！」　ギルは興奮して聞く。

「今はもういないよ…竜も兄さんも…」

セレムは食べ終えたポームの芯を投げ捨てて俯いた。

「セレムのお兄さんは死んだのよ。私は知らないけど竜も一緒に死んだんだと思うわ。お兄さんや竜のことは聞かないで、セレムが可愛そうだから」

アンナはセレムの腕をそと取る。アンナの言葉が余計にセレムの心を重くすることに気づかない。

「フン、おせっかいだね、あんたは」

「え？」

「何でもない。ギル、出発の準備して」

キョトンとしているアンナに、レナはそう言う。

「待って、その前に野菜と果物を売ってよ」

「…おせっかいな上に我が儘で鈍感」

レナは軽くため息をつく、アンナに聞こえないようギルに呟いた。ギルは肩をすくめると口笛を吹きながら果物の籠をアンナの前に差し出した。

「どうぞ！おすすめはポームと黄色野いちご、万能薬の蔓草だよ」

レナとギルは、また竜に乗って隣の町に飛んでいった。もう少し、彼らや竜と一緒にいたかった。竜の谷に住む人々の中には、ラルフのことを知っている人もいるかもしれない。竜とポームの赤い実は、セレムの心を大きく揺さぶる。

結局、ろくに話もしないまま、セレムはポームの入った袋を抱えて家に戻って来た。

家では母親のメーシーが昼食の準備をしていた。いつの間にか、もうお昼近くになっている。

「ただいま…」

スープの鍋をかき混ぜているメーシーの後ろのテーブルに、セレムはポームの袋を置いた。

「どこに行ってたの？何もすることがないなら、家の手伝いか牛の世話をしようだい」

メーシーは振り返らず鍋をかき混ぜながら言う。

「アンナだつて家の手伝いをして働いているのよ。ラルフはあなたよりもっと小さい頃から家の手伝いをしてくれたわ」

「…ごめんなさい」

セレムはそつと台所を出ていった。メーシーがラルフの話を切りだしてくると、セレムの心は締め付けられる。「ラルフは…」「ラルフなら…」「ラルフだったら…」メーシーの心は未だにラルフで占められている。

メーシーが振り向いた時、もうセレムの姿はなかった。

「セレム？」

メーシーはテーブルの上の赤いポームに気づく。

「これは…」

メーシーはポームを手に取りじつと見つめる。ラルフがよく採って来たポーム。今のメーシーにとって、ポームの実は悲しみの象徴でしかなかった。

思慕（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
セレム君、セリフ
少ない。（^^;）なかなか心を開いてくれないので、書きづら
いです…。温かく見守ってあげよう。

飛んできた竜

翌朝。早朝から、セLEMは牛達を連れて草原へ向かった。父親のウィルはまだ不安がつていたが、しぶしぶセLEMに仕事を任せた。「牛を放つたらかしにして帰るんじゃないよ」ウィルは出かけるセLEMに念を押した。

メーシーは黙ったままだった。昨日ポームを持って帰ってから、前にもまして気持ちが沈んだようにみえる。両親を喜ばせようとして買ったポームは、ラルフの思い出を呼び起こし、悲しみを増しただけだった。

いつも良かれと思つてした事が裏目に出る。セLEMは慣れっこだ。テーブルの上に置いたまま手をつけられていないポーム。セLEMは袋の中から一つ取りだしてズボンのポケットに入れてきた。

早朝の草原は朝露に濡れて足元がひんやりする。新しい朝の新鮮な風は気持ち良かった。牛達をいつもの草原に連れて行くと、セLEMは牛達を見渡せる大木のある場所に歩いていった。牛達に自由な草を与えている間、木陰の下で待っている。広々とした草原に、さわさわと心地よい風が吹いてきた。雄大な自然の中に包まれていると、心が癒され落ち着いてくる。

セLEMは木の元に腰を下ろすと、持ってきたポームをポケットから取りだし一口かじった。みずみずしく甘酸っぱいポームの味が、口いっぱい広がる。懐かしいラルフの香りのようだ。

セLEMが二口目をかじろうとした時、遠くの空に影のような物が見えてきた。目を凝らして見つめていると、その影はだんだん大きくなり、やがて竜の形になった。

「竜だ…」

空を見上げるセLEMの目に、昨日見たクリーム色の竜がはつきりとうつる。

「セLEMー！」

ルピイというクリーム色の竜に乗ったギルが、上空からセレムに手を振った。

「?…」

驚いているセレムの元に、竜に乗ったギルがゆつくりと空から舞い降りてきた。

「牛の群を見ていたら、君の姿が見えて降りてきた」

ギルはぴよんと竜の背から飛び降りた。

「セレムはポームが好きなんだなあ」

ポームを手になっているセレムを見てギルが言う。

「お土産でまた持って来たよ」

竜の背の籠には、ポームがたくさん入っていた。

「……」

悲しいポームはもうたくさんだ。

「何しに来たの？」

そっけなく答えるセレム。

「君に会いに来たんだよ。一緒に竜に乗ってみない？セレムは絶対、竜に乗るのが上手いと思うんだ」

ギルは気にすることなく話を続ける。

「…竜になんか乗れないよ」

「大丈夫だよ。ルピイはとても大人しい優しい竜なんだ」

ギルがそつとルピイの長い首をなでると、ルピイはゴロゴロと喉を鳴らす。ルピイはつぶらな瞳で、じつとセレムを見つめた。

「さわってごらん」

「……」

セレムは恐る恐るルピイの背に触れた。昨日と同じ柔らかく温かい感触。幼い頃竜に乗って遊んだ記憶がよみがえる。ルピイは近寄ったセレムの頭を、そつと舌でなめた。

「ルピイも君を気に入ってるみたいだ」

その様子を見てギルは微笑む。竜にもう一度乗ってみたい気持ちは、セレムの中にも強くある。

「でも、牛の世話をしないと…」

「ほんのちよつと乗ってみるだけだよ。僕だつてこつそり竜の谷を抜けてきたから、すぐ帰らなきゃいけないんだ」

「……」

セレムが迷っている間に、ルピイは小さく鳴くとセレムが乗りやすいうちに背をかがめてきた。

「ルピイも君を乗せたがつてる」

セレムは心を決めると、ゆっくりとルピイの背中に上っていった。

竜に乗って

牛達の群が、見る見る小さな固まりになる。草原が小さな原っぱになり、小さな村はミニチュアの模型のようになる。

竜はどんな高度を上げて、空高く舞い上がる。セレムは落ちないよう、しっかりと竜にしがみついていた。あっという間の速さで、竜は雲に届きそうな高さまで上がっていった。

「そんなに力入れてしがみつかなくても大丈夫だよ」

セレムの後ろに乗って竜の手綱を引きながら、ギルが笑って言った。

「……」

三歳の時以来竜に乗っていないセレムは、まだ緊張していた。竜が勢いよく高度を上げると、ビュンビュンとともに風を受ける。風の強さに竜から振り落とされそうだった。

「水平飛行になったら速度がゆっくりになるから」

ギルがそう言って間もなく、竜は上昇を止めて、大きく羽を広げると水平に飛び始めた。

「わぁ……」

ようやくゆっくりと下を眺める余裕が出来たセレムは、真下に広がる深い森の姿を見て思わず感嘆の声を上げた。セレムの村からはもうかなり離れた場所を飛んでいる。ラルフが亡くなってからは村を出たことのないセレムには、見るものの全てが新鮮に映る。森が過ぎ、湖が広がり、また新たな森が始まる。

「海まで行ってみようか」

「うん」

セレムはいつの間にか笑顔になっていた。体中が興奮している。竜で空を飛んだ喜び。セレムの心は一気に明るくなったような気がした。

ギルの合図で、竜のルピイはゆっくりと方向を90度変えて速度

を上げて飛び始めた。速度が速くなっても、セレムはもう恐くなかった。竜のコーリーに乗っていた時の感覚がおぼろ気に思い出された。ラルフと空を飛んだ時も、今と同じ風景を見ていたに違いない。間もなくして、眼下に海が見えてきた。キラキラと朝日を浴びて光る青い海。少し下を飛ぶ力モメ達の群れ。所々小さく船も見える。雄大な海。初めて海を目にするセレムの心は感動で震えていた。

「もう少し行くと山脈があつて、降りられる場所があるから、そこまで行ってみよう」

ほんの少し飛行するつもりが思わず遠出をしてしまった。けれど、ギルとセレムには時間のことなど全く頭になかった。

海を越えてしばらく進むと、山々が見えてきた。広大に広がる山脈。高く険しい山々も、竜から見下ろせば美しい風景画のようだ。

人間の足では決して足を踏み入れることが出来ない山も、竜なら一っ飛びだ。

「?…」

険しい山々を見下ろしている時、セレムの目に何か光るものが映った。一瞬だが、確かに山の中で何かが光った。

「何だろうあれ?…今何か光った」

「光った?」

セレムが指さす方をギルも見だが、その時はもう光りは消えていた。

「もう見えないや。光るつて言えば、竜の卵もかえる寸前によく光るんだよ。でも、ここで竜の卵なんて見たことないからね。カラスが何か光るものを見つけて来たんじゃないかな?」

「そうかな…」

セレムにはもつと強い光りのような気がした。もう一度グルグルと周辺を旋回したが、光るものは見つからなかった。

「竜の卵なら大発見だよ。最近はこの辺では全然見つからなくなつたからね。竜の数も減ってきたんだ」

「……」

竜がだんだん姿を消していくのは寂しい。新しく生まれる竜の卵ならいいのと、セラムは思った。

竜に乗って（後書き）

読んで下さってありがとうございます！
もう少し書く予定でしたが、長くなりそうなので次にします。（^^;）竜にも色々なイメージがありますが、私がイメージしてるのは「ハク」のよ
うな日本の竜じゃなくて、恐竜に近いような西洋の竜です。想像の
生き物だからどんな動物なのかよく分かりませんね。（^^;）

角笛の忘れ物

険しい山脈の真ん中に、平らな山頂が見えてきた。ギルはそこを
目指して竜の高度を下げていった。竜のルピイは、ゆつくりと山頂
に舞い降りる。

「いつもここで休憩してるんだ」

ギルはびよんとルピイの背中から飛び降りる。セレムは竜が着地
した後も、まだ空を飛んでるようなふわふわした感覚が残っていた。
「竜酔いしたの？」

なかなか竜から降りてこないセレムに、ギルが笑って言う。

「うつん…」

じつと座って待っているルピイから、セレムはゆつくりと降りた。
辺りは高い山脈が果てしなく連なっている。まるで天上に上った気
分だ。

「ルピイ、水を飲みに行つといで」

ギルはルピイの背から籠を下ろすと、ルピイの首を優しくなでた。
ルピイは小さく鳴くと、足を立て羽を広げてゆつくりと飛び立った。
見る見るルピイの姿は山の向こうに遠ざかって行く。

「竜はいつ戻ってくるの？」

こんな険しい山の頂に取り残されて、セレムは少し不安になる。

「これがあるから大丈夫！」

ギルは、首にかけていた紐を服の中から引つ張り出す。紐の先に
は、小さな角笛がついていた。

「これでルピイを呼ぶんだ」

ギルは角笛を吹く真似をした。

「どんなに遠くに行つても、竜は必ず笛の音を聞き分けるからね。
誰かの助けを呼ぶ時にも必要だから、大切な物なんだ」

「横笛でも竜は戻って来るのかな？」

「横笛？そうだね、角笛より音は小さいかもしれないけど、戻って

来るんじゃないかな？」

「……」

ラルフはきつと、コーリーを呼ぶ時横笛を使ったに違いない。

「セレムは横笛を吹けるの？」

「……少しだけ」

「ふーん、今度聞かせて。じゃ、僕達もポームを食べて休憩しようか」

セレムとギルはその場に腰を下ろすと、ピクニック気分でポームを食べた。新鮮な山の空気の下で食べるポームは、特別に美味しく感じられた。

ポームを食べてしばらく横になっていた後、ギルは角笛を取り出した。

「吹いてみる？」

ギルは首にかけた角笛を外すと、セレムに差し出した。

「吹けるかな？……」

「横笛みたいに吹くといいんだよ」

セレムはためらいがちに角笛を受け取ると、そつと口にあてて吹いてみた。かすれた小さな音しか出ない。

「もっと強く吹いて」

セレムは息を吸い込み、一気に強く吹く。今度は大きな音が鳴り響き。音は山々に反射して山彦となる。

「そうそうもう一度」

セレムが二、三度続けて吹くと、やがて空にルピイの姿が見えてきた。自分が吹いた角笛の音でルピイが飛んできたことに、セレムは感動した。ルピイはゆっくりとセレムとギルの元に舞い降りる。

「セレムは本物の竜使いみたいだね」

「……」

セレムは自然と笑顔になる。憧れていた兄に近づけたようで嬉しかった。

「もう少し竜で飛んでみようよ」

ギルはポームの籠をルピイに乗せて、ルピイに飛び乗る。

「でも、もう帰らないと…」

「ほんの少しだけだよ。今度はセレムが手綱を持ってごらん」

「うん」

ギルの角笛を首にかけると、セレムは竜に乗った。

竜を操縦するのは面白い。セレムは本当に竜使いになった気分だった。竜で飛ぶことにもすっかり慣れて、セレムとギルはあちこちを飛び回った。時間が立つのも忘れて…。

気づいた時、日は既に西に傾きかけていた。慌てて村の草原に戻ったセレムだが、牛の群の姿はもうなかった。

「…牛がない…」

浮かれ気分からすっかり冷めたセレムは、がっくりと肩を落とすた。

「ごめんセレム、僕も早く帰らないと…レナにまた怒られる」

セレムが竜から降りるとすぐに、ギルはまた飛び立って行った。

「あ…」

セレムはギルの角笛を首にかけたままだったことに気づく。見上げた空には、もう竜とギルの姿はなかった。

諦め

今回もまた、父親のウィルが牛達を連れて帰っていた。

怒鳴られても、ひっぱたかれても良い、そうしたら自分が悪者になれるから。悪いことをしたと反省出来るから。けれど、ウィルは怒らなかった。

「セLEMにはまだ早い仕事だな」

と、沈んだ声で答えるだけだった。母親のメーシーは黙ったまま何も言わなかった。しかし、メーシーの顔には諦めの表情がうかがえる。メーシーはセLEMをちらりと見て軽いため息をつく、食事の準備に取りかかった。

セLEMはどう反応していいか分からない。泣けばいいのか？怒ればいいのか？どっちも出来ないまま、長い間過ごしてきた。ただ、自分は両親には期待されていないということはよく分かっている。いつの間にかセLEMの感情は消え、黙り込む癖がついていた。そうすれば、傷つかなくてすむから。

テーブルの上には、まだ手をつけられていないポームの袋がそのまま置かれていた。また、今夜も静かな夕食が始まる。

次の日の朝。

さすがにウィルはもう、セLEMに牛達の世話をさせなかった。学校も行かず、仕事もしないセLEMには何もすることがない。不機嫌な顔で黙々と家事を進めるメーシーとも居づらい。セLEMが横笛を片手に家を出ていこうとした時、家の上空でバタバタという羽音が聞こえてきた。ふと空を見上げると、一匹の竜が家の前に舞い降りてこようとしている。クリーム色のルピイとは違う、グレイの竜だった。グレイの竜は、スピードを上げたまま、スッと地上に降りてきた。竜の上には、レナが乗っている。

「?…」

「ギルの角笛を返して」

戸惑っているセレムに、竜の上からレナは言った。

「早く、昨日ギルが忘れて帰っただろ」

イライラしながらレナは言う。

「ギルは本当にガキなんだから。ちょっと目を離すとすぐ遊びに行ってしまう。今日は出ていかないよう見張っててもらった」

「でも、君とギルは双子だから同い年だよ」

「！そんなことはどうでもいいんだよ！さっさと角笛を返して、あれがないと困るんだからね」

セレムは家に引き返すと、ギルが忘れていった角笛を持って来た。レナはセレムの手から乱暴に角笛を受け取る。

「もしギルがまた遊びに来ても、竜に乗るんじゃないよ。竜に乗っているのは竜使いだけなんだから」

「……」

レナはセレムを睨むと、竜の手綱を引いた。グレイの竜はグルルツと鋭くいななくと、大きな羽をバタバタ羽ばたかせた。昨日のルピイと違って気性が荒そうだ。飼い主のせいだろうか？ふとセレムが考えていると、竜とレナはあつという間に空に舞い上がっていた。

竜の谷間

草原を流れる小川のほとりに、セLEMは1人佇んでいた。いつも牛達を放牧している場所よりずっと遠くまで歩いてきた。そつと腰を下ろし、持ってきた横笛を口にあてる。草原を吹き抜ける風と穏やかな小川の音の中に、横笛の音色が響いた。

耳に残るラルフが吹いていた曲を、思い出しながら吹いてみる。自己流で吹く横笛は、なかなか上達しなかった。音がずれたりかすれたりする。途中で曲が分からなくなったセLEMは、横笛を吹くのをやめた。そのままごろんと仰向けに寝ころぶ。

セLEMの上には雲のない青空が広がっている。あの空は、竜達が住んでいる谷間へと続いているのだろうか？セLEMが空を見ながら考えていると、青空に黒い物体が見えてきた。それはだんだん大きくなり、やがて竜の形になった。

今朝セLEMの家にやって来たグレイの竜だ。竜は草原の上空をゆっくり旋回すると、スピードを上げてセLEMが寝ころんでいる草原に舞い降りてきた。竜の羽ばたきで、草がざわざわつと揺れる。

「?…」

セLEMは半分身を起こし、目の前に降りてきた竜とレナを見つめる。

「あたしの後ろに乗って」

竜の背に乗ったまま、いきなりレナが言う。

「えっ?…」

セLEMは意味が分からない。さっきは竜使い以外竜に乗ってはいけないと言ったはずだ。

「早く乗りなよ。あんたに会いたいつていう人がいるんだ」

「でも、僕は竜使いじゃないから…」

「良いつて言ってる時は良いんだよ!」

強引なレナの口調に、セLEMは渋々立ち上がる。

「僕に会いたい人って誰？」

「会えば分かるさ」

セレムはよく事情が飲み込めないまま、ゆっくりと竜の背に乗る。

「どこに行くの？」

「竜の谷」

「！……」

セレムが驚いてる間に、竜は羽ばたいて地上を飛び立った。どんどん高く舞い上がり、ぐんぐんスピードを上げていく。気づいた時には風を切って、空を飛んでいた。昨日の竜よりずっと速度が速い。セレムは振り落とされないよう、必死で竜にしがみついていた。

森を抜け、海を越えて、山脈を抜ける、昨日行った山脈よりももっと遠くに飛んでいく。次々に景色は変わり、セレムが見たことのない世界が広がる。

もう一度海の上を渡って行き、深い森を超えた後、また新たな山脈が広がって来た。最初の山脈よりさらに険しい山脈だ。レナの竜は徐々にスピードを弛めると、山の一角を指してスッと舞い降りて行く。辺りを険しい山々で囲まれた谷間に、木で作られた家が見える。竜は家の前に降りていった。

「ここが、竜の谷間？……」

竜から降りたセレムは、辺りを見回した。鳥たちのさえずりが山々から聞こえ、川のせせらぎが近くで聞こえる。

「あんたに会いたいていう人は、その森の奥にいるはずだから」

レナは、木の家の向こうに広がる森を指さす。

「……」

セレムは期待と不安の気持ちを抑えながら、ゆっくりと森の方へと歩いて行った。

竜の谷間（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

これから新たな登場人物が増えていく予定です。ちまちまとした更新ですが（^^;）、最後までお付き合い下さいませ。

兄の友人

竜の谷の森は、木々が茂り辺りには新緑の香りが立ちこめていた。生い茂る葉の間から、木漏れ日が降りそそぐ。小鳥たちのさえずりが木霊し、木々の間を駆け抜けるリス達の姿が見えた。

森をしばらく進んで行くと、どこからコンコンという音が響いてきた。

セレムは、その音のする方へと歩いて行く。だんだん音が大きく聞こえてきて、木々の間に森の木を切る人の姿が見えてきた。

「……」

セレムに背を向けて、若者が斧で木を切っている。

「ラルフ? …」

13才だったラルフよりは年上の青年の体つきをしているが、何故かセレムはその青年に兄の面影を見た。ラルフもよく家で薪木を切っていた。懐かしさがこみ上げてくる。

その時、青年が人の気配に気づきゆっくりとセレムの方を振り向いた。漆黒の真つ直ぐな髪、切れ長の黒い瞳、どこことなく異国を思わせる顔立ちの青年が、じっとセレムを見つめる。

「お前がセレムか?」

青年は口元を弛める。

「あの頃のラルフにそっくりだ」

「! …」

セレムは驚いて息を飲み込む。

「ラルフを知ってるの? …」

青年は、答える代わりに斧を木の幹に打ち込み、セレムを手招きした。

「まあこっち来な」

青年は切り株に腰を下ろす。セレムは青年の方へ近づいて行つた。「俺の名はシン。ラルフは俺より二つか三つ年上だったが、気が合

ってよく遊んでいたな」

シンは、セレムを見て微笑む。

「ラルフはよくお前の話をしていた。やんちゃで手が掛かるけど、可愛くてしかたないみたいだった」

「……」

セレムは目を伏せる。

「ラルフはよくここにも来ていたが、ある日突然来なくなって心配していたんだが……」

「ラルフは……」

「聞いた」

シンはセレムの話を遮った。シンの顔が曇る。自分のせいでラルフが亡くなったことをシンは知っているのだろうか？セレムの心は暗くなる。

「ラルフは良い竜使いになっていたんだろうに残念だ。お前は竜に乗るのか？」

セレムは首を振る。

「竜もいないし……僕には無理」

「ふん、随分自信がないな。ま、竜使いになるには、ある程度の修行も必要だ。そうだ……」

シンは腰に巻き付けている袋の中から、何かを取り出した。

「こいつはラルフにもらったものだ」

「……」

シンがセレムに差し出したのは、手作りの横笛だった。セレムが持っている横笛と同じだ。

「ラルフは何をするにも器用だった。横笛を作るのも吹くのもな」
そう言ってシンは、横笛を口にあて音楽を吹き出した。セレムが知っているいつもの曲……。静かな森の中にシンの横笛の音が響く。セレムはシンが羨ましかった。自分が習いたかった横笛を彼はラルフに習った。しかも、間違えることなく上手く吹くことが出来る。

横笛の音は、いつもより美しく悲しく、セレムの耳に響いていっ

た。

竜の谷の人々

「シーン！セレムー！」

シンが何曲か横笛を吹いたところで、森の中に甲高い声が響いてきた。

「昼飯が出来たようだ」

シンは横笛を袋の中に戻すと、切り株から立ち上がった。

「……」

突っ立っているセレムの元に、ギルが息を切らせながら走って来る。

「今日のメニューは何だ？」

枝木を取り集めながら、シンが聞く。

「ギルのオリジナル特性シチューと特大ポームパイだよ！」

ギルが明るく答える。

「セレムも僕の手作り食べてってね。一度食べたら忘れられないくらい美味しいから」

「ま、料理の腕は認めてやる。竜の扱いもそれくらい出来ればいいがな」

シンは抱えられるだけの枝を肩に担いだ。セレムもシンが切った枝を拾い集める。

「セレムは気が利くな。ギル、お前も運んで行け」

先に帰ろうとしたギルをシンが呼びとめる。

「力仕事はレナに任せてよ。レナの方が力あるんだから」

「確かに。後の枝はレナに任せるか」

シンは声を立てて笑った。セレムもつられて笑う。

「男っぽいとか力持ちとか、レナに言っちゃダメだよ。昨日からずっと機嫌悪いから」

ギルはセレムに念を押した。

「うん、分かった」

セラムは微笑んで頷いた。

木の香りがする丸太の家から、美味しそうなシチューの香りが漂ってくる。木の枝を玄関先に置いたセラムは、シンやギルと家の中に入って行った。

「?……」

テーブルの一番奥に座っている白い服を着た老人を見て、セラムは思わず立ち止まってしまった。白いローブを着て、白髪の長い髪を垂らし、白く長い顎髭を生やしている。まるで、魔法使いか仙人のようだった。

その老人と目が合い、セラムはドキリとした。

「怖がらなくても良いぞ。わしはただの老いばれ竜使いじゃ」

老人はセラムを見ながら、ほおっほおっと笑った。その様子が益々人間離れして見えた。

「彼は長老のコルバ爺さん。コルバ爺さんを見ると大抵みんな驚くんだよね」

笑顔でギルが答える。

「さ、さ、お若いの。シチューが冷めないうちに席に着きなさい。セラムという名じゃったかの?」

「はい…あ、初めまして」

セラムはぎこちなく挨拶すると、シンの横の空いた席に着いた。シンの前には既にレナが座り、その横にギルが座った。皆が席につくと、コルバが短い感謝の言葉を呟き、指を組み目を閉じる。セラムの家では、食事の前に感謝の言葉を唱えていないが、セラムも同じように感謝の言葉を呟いた。

静かな祈りが終わると、すぐに賑やかな食事が始まった。

「見れば見るほどセラムは、ラルフによく似ておるな。ラルフは栗色の髪をしていたと思うが、お前は金色じゃの。どちらにしても男前じゃな」

コルバは楽しそうにほおっほおっと肩を揺らせて笑った。

「さあセラム、冷めないうちにお食べ」

「はい……」

セラムは少し照れながら、シチューを口にした。

「美味しい」

とろけるような美味しさにセラムの顔はほころぶ。

「だろ！僕のシチューは誰も作ることが出来ないくらい美味しいんだよ」

「ギル、水取って」

浮かれているギルにレナが声をかける。ギルはレナに水差しを渡す。

「少しはレナもギルに手料理を覚えようだ？」

「いいんだよ、ギルは好きで作ってたんだから。あたしは他に仕事があるし」

シンに言われ、レナは口をとがらせる。

「ああ、そうだったな」

シンは笑う。明るい話し声、朗らかな笑い声、こんなに楽しい食事をするのは何年ぶりのことだろうか？竜の谷の人々の会話を聞きながら、セラムは次第に晴れやかな気分になっていった。

午後のひととき

食事の後、シンとレナは残りの枝木を取りに森に出かけて行つた。コルバは揺り椅子に座りうとうとと昼寝を始め、ギルは食事の後かたづけと皿洗いを始めた。セレムはギルを手伝って食器を台所に運んだ。

「この水は川から引いてるんだ。水を汲みに行かなくていいから便利だよ」

流し台の小さなポンプを押すと、澄んだ水が出てきた。

「洗濯も出来るし、お風呂にも入れる。今、お湯が出る水道を開発中なんだ」

「君が?……」

「へへ、こう見えても僕は器用なんだよ。後で僕のコレクションを見せてあげる」

意外そうな顔をするセレムに、ギルは得意げに答える。

「みんな楽しそうだな」

人里離れた小さな谷でひっそりと竜と暮らす人々が、セレムはとても羨ましかった。

「仲の良い家族なんだね」

「うん、本当の家族みたいでしょ?」

ギルは洗ったお皿をセレムに渡す。

「本当の家族じゃないの?……」

「僕とレナは双子のきょうだいだけどね。赤ん坊だった僕達をコルバ爺さんが森で拾ってくれたんだって。シンも小さい時コルバ爺さんに引き取られたんだって言うてた」

「ふん……」

セレムは渡された皿を布で拭く。聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がして後悔した。だが、ギルは別段気にする風もなく、楽しそうに皿を洗っている。

「コルバ爺さんにも家族がいなくてずっと独り者だったから、寂しかったんだよきつと。それで、色んなところから子供を集めて来たんだろっね」

「……」

他人同士でも本当の家族のような温かさがある。セレムは、心を通わすことの出来ない実の両親のことを思った。

「セレムには父さんと母さんがいるんだよね？父さんと母さんってどんな感じ？」

「どんなって言われても……」

セレムは言葉に詰まる。

「いなくても寂しくはないけど、こういうものなんだろうって思ってたさ」

ギルは屈託なく笑う。

「……」

両親がいる自分より、いないギル達の方がずっと幸せそうなのは確かだとセレムは思った。窓辺の揺り椅子では、コルバがうとうととまどろんでいる。セレム達の話聞いていていいのかいないのか分からないが、顔には微笑みが浮かんでいた。

「これがペンダントで、こっちがブローチ、それからこれは髪飾り」
後かたづけが終わった後、ギルはセレムを自分の部屋に案内して、箱に入った手作りの品物を披露した。木彫りの物、水晶で出来た物、石を加工した物、様々な種類のアクセサリーがあった。

「すごいなあ」

セレムは精巧な作りの品々を見て感心する。

「結構よく売れるんだよ。時間があれば家で色々作ってるんだ」
ギルは机の上に置いていた作りかけの品を手にとって見せた。

「これは今作ってる髪飾り。後、色を塗って磨いたら完成なんだ」
薔薇の花を形取った木彫りの美しい髪飾りだった。

「特別注文だから、特に手間暇かけてるんだよ」

「ふーん、高く売れそうだね」

「フフン、ある人からプレゼント用に頼まれたものだからね」

ギルは意味ありげに微笑むと、大事そうに髪飾りを布に包んだ。

「ギルなら横笛も作れるかもしれないね」

「横笛？ああ、シンが持つてゐるみたいなの？」

「うん……僕も持つてゐる」

セラムは懷の中から横笛を取りだし、ギルに見せた。

「シンの横笛に似てるね」

ギルは横笛を手に取りじつくりと眺めた。

「作った人が同じだから……」

「横笛は作ったことないけど、今度作ってみようかなあ。よくできた笛だね、作った人はすごく器用な人だよ」

「……」

ギルの見立てた通り横笛は精巧に出来ている。ラルフもギルと同じくらい器用だったから。

竜の谷で過ごすひとときが楽しくて、セラムは時の立つのを忘れていた。気づいた時には、日は西の山に沈みそうになっていた。

竜の谷の夜

西の空が赤く染まる頃、シンとレナが竜に乗って帰って来た。二人は森の木を運んだ後、竜に乗って出かけていたらしい。竜の背に乗せた籠には、たくさんのお実や果物や山菜が詰まっていた。

二人の帰りを知り、セLEMとギルも外に出て行った。

「今日も大収穫だったな」

レナは顔をほころばせながら、シンに言う。

「そうだな。明日はもう少し遠くまで行ってみるか」

シンは竜の背から籠を下ろす。シンのお竜は黒い竜で、レナやギルの竜より一回り大きい。キリツとした凛々しさをセLEMは感じた。

「シンのお竜はハーンって言うんだよ。黒くてカッコイイだよ」

ギルが言うと、竜のハーンはグルグルツと喉を鳴らした。セLEMが近づくと、毅然とした態度でセLEMを見下ろす。逞しくて強そうだ。

沈みかけの太陽が眩しく光り、セLEMは目を細める。

「僕、もう帰らなきゃ」

シンは木の実がいっぱい入った籠をセLEMに差し出す。

「今夜は泊まっていけ、時期に日が沈むからな。これ、運んでくれ」
セLEMは籠を受け取る。

「でも、家に帰らないと叱られるから……」

「泊まっててよ。もう一度僕の手料理が食べられるんだからね」
迷っているセLEMにギルは言う。

「セLEMにはまだまだ話したいことがいっぱいあるんだ」

「フツ、セLEMもギルの長話につき合わされて大変だな。が、今夜は泊まってた方が良く。夜の飛行は素人には危険だ」

「ハーンを使いによればいいじゃろ」

皆の話を聞きつけたコルバが、杖をつきながら外に出てきた。

「ハーンは賢い竜じゃ。伝言をちゃんと伝えてくれるぞ。ほれ、こ

の紙をくりつけておけ」

コルバは伝言を書いた紙をシンに差し出す。

「爺さん、いつの間に？」

「ほおっほおっ、ワシは最初からセLEMに泊まってもらうつもりだったぞ」

紙には『セLEMは竜の谷に泊まります。ご安心あれ。竜の谷の住民より』と達筆で書かれていた。

「やった〜！」

ギルは飛び上がって喜ぶ。レナは傍らで冷めた目をして見ていた。
「よし、ハーン、セLEMの家まで飛んでこれを渡してくれ。いつも通ってる村だ」

シンはハーンの首に紙を入れた袋をくりつけた。

「ハーンは、シンの言葉が分かるの？……」

じつと竜の目を見つめて語りかけるシンを、不思議そうにセLEMは見つめる。

「竜と竜使いは深い絆で結ばれているのじゃよ。ちゃんと心が通じ合える」

コルバは答えた。

「お客人がおると楽しいのお。ワシは夕飯までもう一眠りするとしよう」

コルバはそう言い、笑いながら家に入って行った。

シンの言うことを理解したハーンは、一声吠えたと羽を広げて上空に舞う。そして、赤い空に向かって飛び立って行った。

竜の谷の夜は、ゆっくりと暮れていく。和やかな夕食、気持ちの良いお風呂に浸かった後、セLEMはギルの部屋の窓辺に佇んでいた。ギルとレナは一緒にお風呂に入っている。

窓から見上げた空には三日月が浮かび、満天の星がきらめいていた。セLEMがぼんやり空を見上げていると、シンが歩いて来た。シンは、セLEMの家まで使いに行っていたハーンに餌を与えに行つて

いた。ハーンはちゃんと使命を果たし、伝言を届けたようだ。

「竜達は眠った。今夜は静かな夜だな」

シンも空を見上げる。

「あの、ありがとう。伝言を届けてくれて……」

「礼ならハーンに言いな。明日はハーンに乗って一緒に出かけてみるか？」

「え、いいの？」

セレムの顔がぱつと明るくなる。

「ああ。その代わり朝は早いぞ。寝坊するな」
「うん」

竜も竜の谷の人々も温かい。幼い頃、セレムはよくラルフとこんな会話をしていたような気がする。『ラルフ、明日も一緒に連れてって』『良いよ。でも、寝坊しちゃダメだよ』『うん、ラルフより先に起きる！』ラルフとの約束。けれど、約束が守られることはなく、いつもセレムは寝坊してラルフに起こされていた。

シンの姿がラルフとダブリ、セレムは懐かしく思った。

竜の谷の夜（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

後1人と2匹の竜の登場で、ようやく全員登場となります。最初に竜を「匹」と書いてしまったばかりにずっと「匹」で通してましたが、「頭」と数えた方が良かったかな？と思ったりしてます。（＾＾）

森へ

翌日。セLEMは日の出と共に目を覚ました。昨夜は興奮気味でなかなか眠れなかったが、気づいた時にはもう朝になっていた。窓からは朝日が射し込んでいる。

隣りで寝ていたギルは、既に起きて鏡の前で長い髪をとかしている。竜の谷の人々は皆早起きだ。

「おはよう、セLEM」

セLEMが起きたのに気づいてギルが声をかける。

「おはよう」

髪をといて髪飾りで髪を束ねるギルは、どう見ても女の子にしか見えない。

「先に行つて食事の準備をしてくるよ」

ギルは元気良く立ち上がると、部屋を出ていこうとする。

「ギルもシンと一緒に竜で出かける？」

セLEMが後ろから声をかける。

「僕は行かない。頼まれた髪飾りを仕上げたいし、ほんとと言うと竜に乗るのはあまり好きじゃないんだ」

ギルは振り向くと笑ってそう言った。

「最初の頃は竜酔いしてた。僕は家でアクセサリーを作ったり料理作ったりしてる方が好き。セLEMは最初から竜に上手く乗れてすごいよ。レナみたいに竜使いの才能があると思う」

「そうかな？……」

「レナも行くと思うから、色々教えてもらつといいよ」

「うん……」

ギルは走って出ていった。レナとはまだうち解けず、ろくに話もしていない。なんとなく嫌われていると、セLEMは感じていた。

朝食の後、セLEMとシンとレナは竜に乗って飛び立った。セLEM

はシンと一緒に黒竜ハーンに乗った。セレムは三匹の竜全部に乗ったことになる。クリーム色のルピイは穏やかで優しくて、グレイのレピイは気が強く威勢がいい、そしてハーンは堂々とした威厳がある。竜達にもそれぞれ個性があった。

セレム達を乗せた二匹の竜は、空高く舞い上がり風を切って進む山を越え海を渡り、広い森の上空を飛んでいった。

「この辺で降りよう」

木々が生い茂る森の中心に、湖が見えてきた。シンはその湖を指して徐々に竜の高度を下げていく。後ろからレナの竜も続いた。

二匹の竜は、ゆっくりと大きな湖の上に降り立った。軽く水しぶきが上がる。深い森の中の湖はひっそりと静まりかえっていた。透明な水に竜の姿が映る。竜は泳ぎも上手だ。まるで、竜の形の船に乗ってるようだった。

「雲行きがあやしくなってきたな。一雨きそうだな」

シンはハーンを操りながら、空を見上げる。さっきまで晴れていた空に雲がたれ込めてきた。雨を誘う風も吹いている。

「雷が鳴らなきやいいけど……」

セレムは不安になる。

「あんたは雷が恐いの？」

レナはセレムを見て鼻で笑う。

「……」

「ま、収穫物が雨に濡れないうちに引き揚げた方が良さそうだな」

シンはそう言って、ハーンを岸辺に誘導した。

雨の森

ハーンとレピイの二匹の竜を湖に残し、セLEM達は深い森の中に入って行った。竜の谷の森より木々が茂り、中に一步足を踏み入れると辺りは薄暗かった。聞こえるのは、遠くでさえずる鳥たちの声と草木をかき分け歩く音だけだ。

「見つけた！」

突然レナは声を上げ、大きな木の根元に駆け寄って行った。

「レッドツリーのキノコだ。いっぱいあるよ」

幹が赤みがかった木の根元から、レナはキノコを採り上げた。キノコも赤っぱい色をしている。大きな木のまわりには、たくさんのキノコがはえていた。

「こりゃ大収穫だな。珍しいキノコだから、高く売れるぞ」

シンもキノコを採り、持ってきた籠に入れる。セLEMは初めて見るキノコだった。派手な色のキノコは毒をもっていることが多く、セLEMは採るのをためらった。

「これ、食べられるの？」

「当たり前だろ、毒キノコなんか採らないさ」

かがんでキノコを採っていたレナは、むっとしてセLEMを見上げる。

「ほんとに何も知らないんだから」

「……」

「滅多に採れるキノコじゃないからな。今晚食べてみるといい。普通のキノコとは比べ物にならないくらい美味しいはずだ」

シンに言われ、セLEMも赤いキノコを採ってみた。鼻に近づけると食欲をそそる美味しそうな香りがした。

「竜使いは、植物やキノコの名前を覚えなきゃならない。セLEMも少しずつ覚えていくといいな」

「うん」

セラムはキノコを籠に入れた。自分が竜使いになれたらどんなに素敵だろう、とセラムは考える。

持って来た籠がいつぱいになった頃、森に湿った風が吹いてきた。木々がざわざわと揺れている。

「そろそろ帰ろうか。一雨きそうだ」

シンは立ち上がって空を見上げる。

「もう少し遠くまで行ってみようよ。雨なんてすぐ止むさ」
レナは不服そうな顔をする。

「明日また行けばいい。今日はこれで充分だろ」

シンがそう言った後、ポツポツと雨粒が落ちてきた。

「濡れないうちに帰ろうぜ」

シンはキノコの入った籠に布をかける。遠くの方で小さく雷の音がした。セラムは不安気に空を見上げる。

「突っ立ってないで、あんたも籠を運んで」

「……」

レナが声をかけるが、セラムは棒立ちのまま動けなかった。雨はだんだん強く降り始める。

「もう！キノコが濡れるじゃないか」

レナはセラムが使っていた籠に、急いで布をかけた。

「どうした？セラム」

シンはセラムの様子を不審に思う。と、辺りが突然光り、大きな雷の音が鳴り響いた。

「ギャーッ！！」

セラムは悲鳴を上げ、両手で耳を押さえてうずくまる。早鐘のように心臓が打ち、体中が震えた。

消えない傷

雨足が早くなる。うずくまったセレムの体を冷たい雨が打ちつける。

「セレム！」

シンがセレムの元に駆け寄り肩を揺するが、セレムは動こうとしなかった。

「なんだよ弱虫！雷なんか恐くないさ！早くキノコを運ばないと」
レナはキノコの入った籠を持ち上げる。

「どこかで雨宿りするか」

シンがそう言った時、また鋭い雷の音が鳴り響いた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ラルフ！！」

セレムは泣き叫ぶ。雨と涙で顔は濡れ、金縛りにあつたみたいに体がひきつった。

「セレム」

誰かが呼ぶ声が遠くで聞こえたが、セレムはそのまま気を失った。

森に出かけたのは、ほんの悪戯心からだった。

ラルフは最近竜のコーリーと遠くに出かけてばかりで、あまり遊んでくれなくなった。『竜に乗って遊びに行こう！』とねだっても、『また今度な。今日は大事な用があるんだ』と、1人で出かけて行った。

ラルフが竜の谷に出かけて修行をしていることを、セレムは理解出来なかった。

『ぼくがいなくなったら、ラルフが探しに来てくれる』

セレムはラルフを驚かせようと、1人で遠くの森まで歩いて行った。薄暗く寂しい森。セレムは恐かったが、ラルフが迎えに来てくれると思ってどんどん歩いて行った。同じような森の道。セレムはすぐに迷ってしまった。

いくら待ってもラルフは来ない。そのうち森は暗くなり雨も降り出した。雷の音も聞こえ、セレムの恐怖は増す。大きな木の下で雨宿りして、泣きながらラルフを待っていた。

やがて森が真っ暗になり、嵐のような雨が降り出した頃。ラルフがコーリーに乗って探しに来てくれた。

『セレムー！』

ラルフの声を聞いた時、セレムは怖さも忘れ飛び上がって喜んだ。
『ラルフー！ラルフー！』

セレムが必死で呼び続けると、コーリーとラルフが見つけてくれた。

『セレムー！』

嬉しそうなラルフの顔。しかし、次の瞬間森の中が昼間のようになり明るく光ったかと思うと、激しい雷鳴が鳴り響いた。雷がセレムのいる木の上に落ち、炎が舞い上がりミシミシという音がした。大きな木がセレムの上に落ちて来る瞬間、コーリーとラルフが間に入りセレムを救ってくれた。

木の裂ける大きな音。コーリーとラルフの悲鳴。衝撃で投げ出されたセレムが気づいた時、コーリーとラルフは燃える巨木の下敷きになっていた。驚いたセレムが近づこうとすると、ラルフは弱々しくセレムを手で制した。

『そこにいろ、セレム……』

微かに微笑んで、ラルフはそのまま目を閉じた。永遠に……。

「ラルフー！！」

セレムは叫んで飛び起きた。ここがどこなのか、何をしていたのか、一瞬分からなかった。

「やっと気づいたか。お前を運ぶの大変だったぞ」

シンが笑って言った。隣りにはレナもいる。

「ここは？」

セレムがあたりを見回すと、そこは大きな木の幹空洞の中だった。

「雷くらいで気を失うなんてさ」

レナは立ち上がり、外へ出ていく。

「雨はもう上がったよ。帰ろう」

「そうだな」

セレムは安心したせいか、急に涙が溢れてきた。涙を拭いながら声を出して泣いた。

「どうした？」

「僕のせいだ。僕のせいでラルフは死んだんだ。僕がラルフを殺したんだ……」

シンが近づくと、セレムはシンに抱きついて泣いた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

泣き続けるセレムを、シンはそっと抱きしめた。

「セレム、心の内を話してみろ。全部吐き出してみたら、きっとすつきりするぜ。時間はたっぷりある。お前の話に最後までつき合ってやるから」

あの時から消えない心の傷。ラルフのことを思い出すだけで傷む心。セレムはシンにしがみついて泣き続けた。

「……」

レナは黙ってシンとセレムを見ていた。

「レナは先に帰っていいぞ。俺は後からセレムと帰る」

突っ立ってるレナに、シンは言う。

「……雨が上がったから、もう少しこの辺を見てくる」

レナは籠を手にとると、外に出ていった。

消えない傷（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

感想、評価ありがとうございます。とても励みになります。読んで期待を裏切らせてしまった方すみません！私はご期待にこたえられるような者ではございません（言い訳^^;）これからも自分なりに頑張って完結を目指します。よろしく願います。 m（

） m

時は流れる

日が沈みかけた頃、竜の谷にレナを乗せたレピイが帰って来た。家の外にいたギルはレナだけが帰って来たことを不思議に思う。

「シンとセLEMは？」

レピイから降りたレナにギルは聞く。

「ハーンに乗ってセLEMを家まで送ってた」

レナは短く答えると、竜の背からキノコの入った籠を下ろした。

「えっ？セLEMはもう帰ったの？もう一晩泊まるのかと思ったのに。せつかくセLEMの分も特性ミートパイ作ったのにな」

「セLEMは自分の家で過ごす方がいいんだよ」

「残念だなあ。髪飾りも完成したからセLEMに見せようと思ったのに」

「……ギルも籠を運びな」

レナはキノコの籠を抱え上げる。

「ね、もうすぐアリシアが来るよね？」

「さあ……」

嬉しそうに話すギルとは対照的に、レナは口ごもる。

「楽しみだなあ」

「なあ、ギル……」

重そうに籠を抱えるギルにレナは言う。

「何？」

「あたしたちは赤ん坊の時森に捨てられてたんだよね？」

「うん、コルバ爺さんが森で拾ったって言ってた」

「どれくらい森の中にいたんだろう？」

「さあねえ？赤ん坊だったからわかんない」

「あたしさ、森で夜を過ごしたような気がする。……だから、今でも夜の森って苦手なんだ。きつと恐かったんだと思う」

「ほんとに？僕は全然覚えてないや」

「あんたはね……」

レナは軽いため息をつくとき、キノコの籠を持ち上げた。

「？レナにも恐いものがあるんだ？」

「フン……」

笑うギルを置いて、レナは家に入って行った。

セレムは家に帰って来た。何も変わっていない、いつもと同じ家。両親はセレムが竜の谷に泊まったことについて、特に何も言わなかった。竜の谷のことを聞くわけでもなく、もう行ってはいけなと言いつけでもない。いつものように何も語らない。

セレムには慣れっこだ。けれど、もしかしたら両親は「語らない」ではなく、「語れない」のではないかと、セレムは思った。

両親もセレムと同じように、過去を思い出すのが恐いのかもかもしれない。

森の中で泣きながらシンに打ち明けたラルフの話。今まで誰にも語らなかつた辛い記憶。両親は決してセレムを責めたりしなかつた。行き場のない深い悲しみは、いつの間にか家族の中に暗い影を落とし月日と共に広がっていったのかもしれない。

シンはセレムの話をじつと聞いてくれた。

「コルバ爺はいつも言ってる。どうしようもない悲しみを癒してくれるのは時の流れだけだと。慰めの言葉も優しい言葉も本当の悲しみを癒してくれはしない。泣きたいだけ泣いて悲しむだけ悲しんだら、時が全てを包み込んで苦しい気持ち忘れさせてくれる。全てのことは時が解決してくれる。八十年近く生きてきた人間の言うことだ、信じてみるのも悪くないだろう」

そうシンは言った。セレムの悲しみが癒されるには、まだまだ時の流れが必要なのかもしれない。しかし、シンに語ったことでセレムの心は少しだけ軽くなったような気がした。

花畑で

竜の谷から帰って数日がたった。

もう牛達の世話を任されることはなかったが、セレムは少しずつ家の仕事をするようになった。家族のために働きたいというのが、セレムの小さな願いだ。

その日は朝から庭で薪を割っていた。いつもは父親がしていたが、セレムは見よう見まねでやってみた。単純に見える仕事でもやってみると力があるし、上手く割るのは難しかった。それでもラルフやシンに少しでも近づきたい。両親に認めて欲しい気持ちでいっぱいだった。

斧を振り下ろしコンツと勢いよく薪が割れた時、アンナが走って庭に駆け込んできた。

「セレム！久しぶりね。何してるの？」

見れば分かることをアンナはわざわざ聞いた。

「薪割り」

「もうたくさん割ったでしょ。私と遊びに行きましょうよ。今日は母さんが出かけていないからゆつくり遊べるわ」

「でも……」

まだ薪割りを始めたばかりで、用意した木の半分も割っていないかった。

「丘の上に珍しい花がたくさん咲いてるところがあるの。たくさん摘んで売りに行きたいのよ。花飾りも作りたいし」

アンナは楽しそうに笑うと、斧を下ろしたセレムの腕をとった。腕を掴まれては、もう薪割りは出来ない。

「セレムにも花飾りを作ってあげる」

「……」

花飾りをもらってもちつとも嬉しくはない、とは言えないセレムだった。

「残った薪は後で割ればいいわ」

アンナはセレムの腕を引っ張る。

「ロバに乗って行きましょう！そこに止めてあるの」

薪割りの仕事を気にしながらも、セレムはアンナの誘いに従うしかなかった。

ロバの背に揺られ、セレムとアンナはゆっくりと丘に向かった。

アンナが案内した丘には、色とりどりの花が辺り一面に咲き誇っていた。甘い香りが漂い、蝶や蜂が飛び交っている。

「蜜蜂には気をつけて。花の中に入り込んでることがあるから」

ロバから降りると、アンナは早速花を摘み始めた。セレムもロバを降りて花を摘む。アンナは楽しそうに歌を歌いながら、摘み取った花を次々と籠の中に入れていく。花を摘むことがそんなに楽しいことだろうか、と不思議に思うセレムだった。

籠の中が花でいっぱいになると、アンナは摘んだ花で花飾りを作り始めた。

「待っててね。特別綺麗な花飾りを作ってあげるからね」

「……」

嬉しそうなアンナを後目に、セレムは花の間にごろんと横になった。花の香りに酔ってしまいそうだ。目をつぶりうとうとしかけた頃、セレムを呼ぶ声が頭上から聞こえてきた。

「セレムー！」

目を開けると、空からルピイに乗ったギルが降りてくるところだった。ルピイはゆっくりと舞い降りて来て、アンナとセレムの元に着陸した。

「あんだ、この間の女みたいな双子の竜使いね」

セレムとの二人だけのひとときを邪魔されたアンナは、面白くなさそうにギルを見る。

「君はアンナだったよね？わあ、綺麗な花飾り」

ギルはアンナが手にしている円形の花飾りを見つめる。

「これはセレムのよ」

アンナは花飾りを後ろに隠す。

「いいなあ。後二つ作ってよ」

「嫌。綺麗に作るの大変なんだから」

「なら、この木苺と交換でどう？」

ギルは、竜の背の籠から黄色い苺を差し出す。

「竜の谷でしか採れない珍しい苺だよ」

「……」

アンナは美味しそうに熟れた苺をじっと見つめる。

「いいわ。でも、一つだけよ」

木苺の誘惑に負けたアンナは、早速花を摘みに行く。

「僕の花飾りをあげるよ……」

セレムは小声でギルに言った。

「ほんと？ いいの？」

「アンナには内緒だよ」

喜ぶギルにセレムは念を押す。

「花飾りが出来たら一緒に竜の谷に行こう。セレムを呼びに来たんだ」

「僕を？ でも、今日は夜までには戻らなきゃ。薪割りの仕事を放ったままだから」

「いいよ、夕方までには送ってあげる。今朝、アリシアが竜の谷に来たから、セレムにも紹介したかったんだ」

「アリシア？」

「彼女も竜使い。遠い国に住んでいるんだけど、時々竜の谷にやってくるんだ」

「ふーん」

また竜の谷に行けると思うと、セレムの心は弾んだ。

花畑で（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

セレムは「ノー」と言えない、優柔不断なところのある性格のような気がしました。時として残酷…（^^;）

もうそろそろ物語は後半に入ります。ラストスパートで頑張りたいです。

銀色の竜に乗った人

黄色い木苺と花飾りを交換して、ギルは嬉しそうに花飾りを頭に乗せた。

「似合う?」

「うん……」

益々女の子らしくなるギルを見て、セレムは言葉に詰まる。

「じゃあ、竜の谷に行こうか。アンナも一緒に来る?」

「嫌よ、竜に乗るなんて。落ちたら死んじゃうわ」

「落ちたりしないよ。ルピイは竜の中でも一番ゆっくり飛ぶんだから」

「嫌。あの男みたいな竜使いに会いたくないから」

アンナはツンとして、木苺を花と一緒に籠に入れロバの背に乗せた。。

「フフ、レナと喧嘩になるかもしれないもんね」

「私、帰る」

アンナはそう言っただけでロバの背にまたがった。

セレムとギルがルピイに乗って空に舞い上がった後も、アンナはロバの上からじつとセレム達を見上げていた。

「アンナ、なんで怒ってるのかな?」

ふくれっ面をして睨み続けているアンナを見下ろしながら、ギルは不思議に思う。

「分からない……でも、アンナはよく怒るから」

「そう? レナと一緒にだね。僕はいつも怒られてばかり」

ギルは笑った。アンナの姿が豆粒のように小さくなり、やがて視界から消えると、セレムはもらった花飾りをギルに渡した。

「ありがと。これはアリシアにあげるよ。彼女は花が大好きだから」

険しい山を越えて竜の谷が見えてくると、セレムの心は一層弾ん

でいった。まだ一度しか行ったことのない場所なのに、故郷に帰って来たような懐かしさと温かさがあった。

ルピイはゆつくりと竜の谷間に向かって降りていく。と、ギル達の家の前に銀色に光るものが見えた。日の光に反射してキラキラと輝いてる。

「あつ、クレスがいる！クレスは綺麗だなあ」

ギルが下を見て言う。

「クレス？」

「アリシアの竜だよ。銀色をしてるんだ。でも、僕が一番好きなのはルピイだから」

クウと喉を鳴らすルピイの首を、ギルは微笑んでなでる。高度が下がると、銀色の竜の姿がはっきりと見えてきた。まばゆいばかりに光る銀色のウロコは、美しい。その竜の横に、1人の女性が佇んでいた。

「アリシアー！」

ギルが手を振りながら声をかけると、アリシアという女性はゆつくりと振り返った。金色の長い髪がキラキラ光って、銀色の竜以上に美しかった。アリシアは、着地したギル達を見ると微笑んだ。

「お帰りなさい」

「はい、これプレゼントだよ！」

ギルはルピイの背からぴょんと降りると、花飾りをアリシアに差し出した。

「まあ、綺麗な花飾りね！とても良い香りがするわ」

アリシアは花飾りを顔に近づけて、甘い香りを吸い込んだ。

「ありがとう。そちらがお友達？」

アリシアはルピイの背に乗っているセLEMに目をやる。

「そうだよ、セLEMって言うんだ」

「私はアリシア。これは私の竜クレスよ」

アリシアはセLEMに微笑みかけ、竜のクレスの背をさすった。
「どうしたの？セLEM。降りといでよ」

ルピイに乗ったまま降りてこないセレムに、ギルは声をかける。

「……」

セレムは伏し目がちに、ゆっくりと竜から降りた。何故かアリシアを見るたびに心臓がドキドキして顔が熱くなってくる。セレムより年上で大人の雰囲気があったように美しい人。

「……は、初めまして。セレムです」

セレムは小さな声で、ようやくそれだけ言えた。アリシアが輝いて見えるのは、日の光で輝く髪の毛のせいだけではない。アリシアの微笑みを見て、セレムは思った。

魔法の微笑み

「セレムはラルフの弟だったのね」

セレムがアリシアや竜の谷の人々と和やかな食事をとっていると、不意にアリシアに声をかけられた。一瞬ドキツとして、スープを飲もうとした手が止まる。

「ラルフによく似ているわね。まるでラルフに再会したみたい……」
アリシアは少し寂しげに微笑む。アリシアも子供の頃のラルフを知っている。子供の頃のラルフが、アリシアの心の中には今も生き続けているのだろうか？

「アリシアとラルフはとても仲が良かったのう。つい昨日のことのようじゃ」

コルバがほおと笑いながら答える。

「二人が並んで竜に乗っている姿は、絵のように美しかったのう」

「コルバ爺、俺もいたことを忘れるな」

横からシンが言う。

「そうじゃったかな？よく覚えておらんわ。まあ、それにしてもアリシアは見るたびに美しくなっておる。わしが10才若ければ、プロポーズするんじゃが」

「10才くらい若くたって今と変わんないよ、コルバ爺さんは」
ギルはそう言って笑った。

「そうかの？では、今でもまだ望みがあるということじゃな」

「そう言う意味じゃないだろ。爺さんは幸せ者だな」

と、シンが言うとアリシアは楽しそうに笑った。

「……」

アリシアの笑顔が目に入るたび、セレムの心も明るくなる。アリシアの笑みは眩しすぎる。

「スープ、こぼれてるよ」

不意にレナがセレムに言った。スープを口に運ぼうとしたままア

リシアに見とれてしまい、セレムはスプーンからスープがこぼれたことに気づかなかった。

「あ……」

スープはズボンの上にシミを作っていた。

「なにぼけつとしてんの？」

レナは苦笑いして肩をすくめた。

「ほおっほおっ、セレムもアリシアの美しさに見とれておったのじやな」

「ち、違います！」

コルバに凶星されて、セレムは思わず大声を上げた。とたんに皆の視線が集まり、セレムの顔は真っ赤になる。

「……」

「若いとは良いもんじゃ」

コルバは声を立てて笑った。

セレムはろくに食事をとることが出来なかった。ギルの美味しい手料理さえも、アリシアの微笑みの前では味を無くしてしまう。

食事の後、ギルとレピイに乗って帰ろうとした時、アリシアが駆け寄って来た。金髪の長い髪を薔薇の髪飾りで留めている。

「セレム、もう帰ってしまうの？もっとゆっくり話したかったわ」

「……あの」

アリシアに見つめられるだけで、セレムの心臓は早鐘のように打ち始める。本当は帰りたくはない。ずっとアリシアの側にいたかった。

「また、また明日も来ます！」

セレムはどうにかそれだけ言えた。

「本当に？良かったわ。明日は一緒に竜で出かけてみましょうか」

「！……はい！」

セレムの心は舞い上がりそうになる。

「じゃ、また明日ね」

アリシアは手を振る。竜が空に上がってから、セレムはずっとアリシアに手を振り続けていた。

「明日も来るってことは、僕が迎えに行かなきゃいけないよね？」

「あつ……うん、お願い」

気やすく返事をしたセレムだが、竜の谷が家からかなり遠いということを忘れていた。

「いいよ。セレムから来たいっていうの珍しいね」

「そうかな？」

「セレムもアリシアに会いたいんだね。アリシアは美人で優しいからみんなの人気者なんだよ」

ギルが笑う。セレムの頬はまた熱くなった。

「あの、アリシアが髪につけてた髪飾り、ギルが作ってたものだよね？」

「うん、そうだよ」

「ギルがプレゼントしたの？」

「正確には、シンに頼まれて僕が作ったものをシンがアリシアにプレゼントしたんだ」

「ふーん……」

自分も何かアリシアにプレゼントしたい、とセレムは思った。

家に帰ったセレムは、さっそくやりかけの薪割りの仕事を始めた。母親はセレムがまた仕事をほっぽりだして遊びに行ったことで、機嫌が悪かった。けれど、セレムはちつとも気にならなかった。明日のことを考えると、心が躍り出して自然と笑顔になってくる。

アリシアの微笑みは、まるで魔法のようにセレムの心を軽くする。薪割りさえ楽しく感じるセレムだった。

輝く光

翌日。

セレムはいつもより早く目を覚まし、朝の支度も早々とすませた。昨夜は興奮気味で、なかなか眠ることが出来なかった。頭の中はアリシアのことでいっぱいだ。アリシアのことを考えるだけで幸せな気分になる。この気持ちは何なのか、セレムはまだ気づいていない。ただ、一刻も早くアリシアに会いたいと思うだけだ。

空は晴れ渡る青空。ギルが迎えに来るのを待ちきれず、庭で空を見上げていたセレムの元に元気な声が響いてきた。

「セレムー！」

昨日のように、アンナが元気良く駆け込んできた。

「今日も母さんが用事で出かけたの！また遊びに行きましょうよ。今日は隣り町まで行きたいわ！」

アンナは息を切らせながら、嬉しそうにセレムに言った。機嫌はすっかり良くなっているようだ。

「ロバを連れてきてるから、乗って行きましょう！」

アンナはセレムの腕を取る。

「今日はダメだよ」

セレムはアンナの手から腕を外した。

「今から竜の谷に行く予定だから」

今まで誘いを断ったことのないセレムが、きっぱりと断ったことにアンナは戸惑う。

「……竜の谷なんて、昨日行ったじゃない」

「ある人と約束したんだ、今日は一緒に出かけるって」

「ある人って誰よ？」

「アンナの知らない人。竜使いなんだ」

「……」

アンナの顔から笑顔がなくなっていく。いつも自分の言うことは

何でも聞いてくれたセレムのささやかな反抗が、アンナにはショックだった。

「あっ、ギルが来た！」

空にルピイに乗ったギルの姿が見えてきた。アンナの気持ちには気づかず、セレムは笑顔でギルに手を振った。

「竜使いなんか大嫌い！」

ルピイが地上に降りてくる前に、アンナは走って帰って行った。

竜の谷までの道のりが、今日はとても長く感じられた。ルピイは他の竜に比べて速度が遅いが、それでもいつもより遠い気がした。だがその分、竜の谷が見えてきた時の嬉しさは大きかった。

既にアリシアは家の前で、竜のクレスと待っていた。セレムの胸の鼓動が高まる。

「おはよう、セレム。今日は良い天気ね」

到着したセレムに、アリシアが笑顔で言う。アリシアの笑顔は今日も眩しい。

「これ持ってって！」

先に竜から降りていたギルが、籠を下げた走って来た

「お弁当だよ、お昼に食べて」

「ありがとう、とてもいい匂いがするわ」

「ギル手作りの焼きたてのパンと野菜と果物。シンとレナにも渡したから」

「二人は何処へ行ったの？」

籠を受け取りながら、セレムが聞く。

「いつものように収穫に行ったよ。今日は遠くまで行くと行ってたな。僕はこれからアクセサリー作り。今日は木彫りのプレスレツドを作るよ」

完全にアリシアと二人だけの飛行になることに、セレムは嬉しさと不安を感じる。

「さあ、行きましようかセレム」

ぼんやりしていたセレムは、竜の背に乗ったアリシアに声をかけられ、慌てて籠を竜の背に乗せた。

「はい。お願いします」

「そんなに緊張しなくて良いわよ。クレスは優しい竜だから」

アリシアは笑う。セレムの頬は見る見る染まっていた。

「はい……」

遠慮がちにアリシアの後ろに乗る。竜に乗るのは慣れてきたセレムだが、今日は特別緊張していた。ギルに見送られ、竜の谷を飛び立つてからしばらく胸のドキドキはおさまらなかった。

やがて、険しい山々の上を飛んでいる時、セレムの目に何か光るものが映った。それは、初めてギルと飛行した時ちらりと目にした光りに似ている。今はあの時よりももっと強い光りだった。

「あれ何だろう？」

「えっ？」

セレムが下方を指さすと、アリシアも下を覗き込んだ。この前はすぐに消えて分からなくなった光りだが、今度はずっと光り続けている。アリシアもはつきりとその輝かしい光りを目にした。

輝く光（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

残り1/3くらいで完結する予定です。（あくまでも予定です。^
^；）目標の2ヶ月以内はちよつと無理な気がします…短編も書きたいし、リレー小説も頑張りたいです。書きたいものはたくさんありますが、なかなか思うようには書けませんねえ〜マイペースで書き続けたいと思います。

竜の誕生

「あれは？もしかしたら……」

アリシアはその光りに釘付けになる。

「セレム、下に降りてみましょう！」

クレスを操縦し、アリシアは光りの元まで高度を下げていった。光りに近づくにつれ、輝きは増してくる。太陽のように差す光に目がくらみそうだ。

やがて、光源の真上に来るとセレムは驚きの声を上げた。

「卵だ！卵が光ってる！」

山頂の木々の間に、両手の平で抱えられるくらいの大きさの白い卵があった。強い光りは卵から発せられている。

「セレム、あれは竜の卵よ」

「竜の卵！？……」

ギルが言っていた、竜の卵はかえる寸前に光るのだと。あの卵からもうじき竜が生まれようとしているのだろうか？セレムはだんだん興奮してきた。

「竜が生まれるのかな！？」

「あんなに光っているなら、誕生間近だと思うわ」

アリシアはクレスを木々の間にそっと着陸させた。まわりの木々も卵の光りに照らされて、眩しく光っている。クレスから降りると、セレムは卵の元まで走って行った。卵は、太い木の幹の間にひっそりとのつていた。光りが眩しくて直視出来ないが、卵は微かに動いているように見える。

「こんな所に竜の卵があるなんて、思ってもみなかった」

後から来たアリシアが呟く。

「竜の親もいるのかな？」

「竜の親は子育てはしないわ。きっと、どこかの竜が産み落とした卵ね。竜の卵は孵化するまでに長い時間がかかるの。それまでに死

んでしまったり、動物に襲われたりすることもあるから、無事に孵化出来る卵は少ないのよ」

「でも、この卵は大丈夫だね？ちゃんと生きてる」

「そうね。」

アリシアは微笑む。

「見つけてくれた人が良かったわ。竜は卵からかえった後も1人では生きていけないの。だから、卵が光って竜使いを呼ぶのよ」

「そうか……だから、アリシアを呼んだんだね？」

「私を呼んだんじゃないと思うわ」

「え？……」

「あつ、セLEM見て」

セLEMが卵の方を見ると、光り輝いていた卵が大きく動き白い殻に亀裂が走った。

卵の中で何かが動いている。光りに透けた卵に小さな生き物の姿が映った。

「あれが、竜？……」

固唾を吞んで卵を見つめているセLEMの目の前で、卵の亀裂から小さな竜が頭を覗かせた。真つ白な体、水色の大きな瞳でキョロキョロとあたりを見回している。

「主人を探しているのよ。セLEM、あの子の側に行ってあげて」

「僕が？……」

不思議がるセLEMをアリシアは後押しする。

「……」

セLEMはゆっくりと小さな竜に近づく。卵が割れると共に、光りはだんだんと弱まってきた。

白い竜はセLEMの姿を確認すると、首を伸ばし小さな腕を出して残りの殻を破って出てきた。そして、たどたどしい足取りでセLEMに近づいてくる。まだ、子犬ほどの大きさしかない。白い竜はセLEMの足元まで来ると、セLEMを見上げてクウと小さく鳴いた。どうしたらいいか分からないセLEMは、振り返ってアリシアを見る。

「抱いてあげて。その子はあなたの竜よ」

「……僕の竜？」

戸惑いながら、そつと竜に手を差し伸べると、赤ちゃん竜は勢いよくセレムの腕の中に飛び込んできた。竜の温もりを感じながら、セレムはしっかりと生まれたばかりの竜を抱きしめた。

竜の誕生（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

ようやく赤ちゃん竜が登場しました！竜の誕生とか習性については、私の想像です。（^^）竜の谷の竜はそうなんだと思ってくださいね。実物の竜を見たことがないので……

竜使いの誕生

真っ白な小さな竜は、セレムの腕の中でスヤスヤと眠っている。セレムのことを主人だと思い、すっかり安心しきっている。その寝顔を見て、セレムは竜を愛おしく思った。

竜の谷に戻って来たアリシアとセレムは、生まれたばかりの赤ちゃん竜を皆に披露した。皆新しく竜が生まれたことに驚いていた。この近くではもう何年も竜の誕生はなかった。

「あの光りはやっぱり竜の卵だったんだね！」

ギルはセレムが抱いている竜を覗き込み、そつと体に触った。

「可愛い。柔らかくてばやばやしてる」

「めでたいことじゃ。また新しい竜の命が生まれたのじゃな」

揺り椅子に座っているコルバは、椅子を揺らしながら目を細めて笑う。

「この国にもまだ竜がいたとはな。竜の谷以外で竜を見たのは初めてだ」

シンも物珍しそうに白い竜を見つめる。

「そうね。私が住んでいる南の国には、まだ竜がたくさん住んでいるんだけど……この子は竜の谷の最後の竜になるかもしれないわ。大切に育てなきゃ」

「誰が竜の面倒をみるの？」

アリシアが言うと、レナが質問した。

「この子はセレムの竜よ。セレムを主人に選んだんだと思うの」

「セレムの竜？……」

レナは驚く。

「セレムも竜使いってこと？」

「……」

セレムは竜を抱いたまま戸惑う。ラルフのような竜使いになることが、幼い頃の夢だった。しかし今、実際に竜の赤ちゃんを手に入

れても、どうしたら良いのか分からない。

「ほおっ、ほおっ、新しい竜と新しい竜使いの誕生じゃ。めでたさも二倍じゃな。ギルや、今日は御馳走を作ってくれ。宴会じゃ」

セレムの心配をよそに、コルバは浮かれ気分だ。

「でも、僕……竜の育て方なんて分からない。竜使いになる自信なんてない」

「心配するでない。竜は放っておいてもすぐに大きくなるわい。ここにはたくさん竜使いがおるじやろ。わしもそのうちの1人じゃ」

コルバは笑った。

「簡単だよ、セレム。竜はすぐに何でも食べるようになるよ。最初だけミルクを飲ませてあげればいいんだ」

ギルがそう言った時、セレムの腕の中の竜が目を覚ました。大きな口を開けて欠伸をすると、そわそわと辺りを見回してクウクウと鳴いた。

「さっそく腹を空かせたみたいだぜ。最初の1、2週間は、付きっきりで世話してやらなきゃな」

シンが言う。

「セレム、いらっしやい。一緒にミルクをあげましょう」

「……はい」

アリシアに促されて、セレムは後に続く。アリシアが側にいてくれたら、とても心強くなるセレムだった。

「この子の名前はもう決めた？」

「ううん、まだ」

「どうやら、女の子のようよ。真っ白でとても美人になりそうね」

アリシアは微笑む。

「ア、アリシアの竜の方が綺麗だよ……」

『アリシアの方が綺麗』と言いそうになり、セレムは1人で赤くなる。白い竜は大きな水色の瞳で、じっとセレムを見つめていた。自信のないセレムでも、竜はセレムを頼り信頼しきっている。この竜のためにもすっかりしなくては、とセレムは思う。

守ものが出来た時、大切なものを得た時、前より強くなれるような気がした。

「この子はフェアリ……フェアリっていう名前にする」

セレムは顔を上げて、アリシアに言った。

「フェアリ？良い名前ね。この子にピッタリだわ」

小さな白い竜、フェアリは、セレムとアリシアの顔を代わる代わる見ながら、自分の名前に満足したように鳴いた。愛しいフェアリを見つめながら、セレムは竜使いになることを決心した。

竜使いの誕生（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

6人同時の会話は、難しかったです……（^^;）皆に話させ、誰が話しているか分かるようにするのは大変ですね。分かったもらえたら良いですが。（^^;）

新しい家族

日暮れ前、セレムは小さな竜フェアリを連れて家に帰って来た。

1人で竜の世話をするのは、少しばかり不安だった。だが、竜使いになる決心をした今、自分の竜と離れる訳にはいかない。竜はセレムにとって分身のような存在だ。そして、これから共に生活する竜を、早く両親に見せたかった。

両親は、竜使いになることを許してくれるだろうか？竜を迎え入れてくれるだろうか？ラルフが亡くなって以来、竜の話はいつさいしなくなった両親のことを考えると心配になる。

「……ただいま」

フェアリを胸に抱えて、セレムはそつと家の中に入って行った。

フェアリはスヤスヤと気持ち良さそうに眠っている。母親のメーシーは、セレムに背を向けて台所に立っており、父親のウィルは、椅子に腰掛けて斧の手入れをしていた。セレムが声をかけても、二人とも振り向かない。

「あの……竜を連れてきたよ」

突っ立ったままのセレムは、小声で言った。その声は、かまどでグツグツ煮える鍋の音にかき消される。セレムは竜を抱く腕に力を込め、深呼吸した。

「僕、竜使いになりたいんだ！」

セレムが大きな声を出すと、腕の中のフェアリはビックリして目を覚ました。両親も驚いて、セレムに顔を向ける。

「あの……竜を家で飼ってもいい？」

突然の言葉に目を丸くしている両親に、セレムは戸惑いながら聞いた。沈黙が流れる。フェアリは新しい環境に驚いて、辺りをキョロキョロ見回しながら鳴いた。

「その竜は？」

メーシーは白い竜にくぎ付けになる。

「……山の中で見つけたんだ。今日、卵から孵ったばかりで、誰かが世話をしないと死んでしまうんだよ。だから、僕が竜の面倒をみる」

「お前が竜の親代わりになるというのか？」

ウィルは椅子から立ち上がり、竜をよく見ようとセレムに近づく。フェアリは怖がる様子もなく、首を伸ばしてクウクウと鳴いた。

「ずっと面倒見る。竜と竜使いは一生離れないんだ。ずっと一緒に暮らすんだよ」

「……」

メーシーは口に手をあてたまま、黙ってセレムを見つめていた。

「……竜使いになっていい？……」

何も言わない母親に、セレムは不安になる。やっぱり自分では無理だろうか？家の仕事さえちゃんと出来ないのに、竜使いになることなど出来ないのかもしれない。ラルフのようにはなれないのだろうか？弱気になったセレムは口をつぐむ。

「……ラルフと同じだわ」

しばらくして、メーシーが口を開いた。その目には涙が浮かんでいる。

「ラルフも小さな頃、お前のように赤ん坊の竜を抱いて家に帰って来た」

「コーリーを連れて来たの？」

メーシーは頷く。涙が一筋流れたが、顔は微笑んでいた。セレムが覚えているのは、成長した大きなコーリー。あのコーリーが子供の手で抱えられる程の大きさしかなかったなんて、信じられない。それよりも、ラルフが亡くなって以来、竜の話などしたことがないメーシーが、嫌がらずラルフと竜の話をしている。その事がセレムには意外で、嬉しかった。

「ラルフもお前のようにたずねたわ。竜を家で飼ってもいい？竜使いになってもいい？って」

「最初はビックリしたがな。まだ小さな子供が竜使いになるなんて

無理だろうと思ったよ。だが、ラルフがあまりにしつこく頼み込むんで、しまいには許してやったよ」

ウィルも昔を懐かしむように微笑む。

「僕は？……僕のことは許してくれる？」

セレムは不安な気持ちを抑えながら聞いた。

「きつと、お前にもラルフと同じ血が流れているんだわ。竜使いの血が。……竜使いになるのが運命なんだね」

メーシーは涙を拭いて笑った。久しぶりに見るメーシーの笑顔だった。セレムはそれだけで嬉しくなる。

「じゃ、竜を飼ってもいいの？僕も竜使いになっていい？……」

念を押すセレムに、メーシーは無言で頷く。

「今更ダメだと言ったら、この竜の行き場がなくなるだろう。竜はお前が責任を持って育てるんだ」

ウィルは、自分の方に手を伸ばして来たフェアリを抱き上げてやった。フェアリはとても人なつっこい竜のようだ。

「こんな小さな竜が、半年もすれば人を何人も乗せられる程の大きさになる。お前がこの竜で空を飛ぶようになる日もすぐに来るだろうな」

セレムは、大きくなったフェアリに乗って空を飛ぶ姿を想像してみた。それだけで胸がワクワクしてくる。

「ありがとう。僕、必ず竜使いになる」

初めて両親に自分のことを認めてもらえた気がした。まるで竜のフェアリが、家に幸せを運んでくれたみたいだ。

嫉妬

フェアリのおかげで、両親と心が通じ合えた。心のわだかまりが次第に消えていく。小さな竜は人々の心を和ませる力ももっているようだ。

久しぶりの家族との和やかな食事を終えたセレムは、フェアリを抱いて部屋の窓辺に佇んでいた。満ち足りた気分窓の外を見上げる。空は夕焼けで真っ赤に染まっていた。明日も竜の谷に行く予定だ。竜のことについて、まだまだ学ばなければならないことはたくさんある。

セレムが窓辺を離れようとした時、フェアリが窓の外の方へ首を突き出しクウクウと鳴いて手足をばたつかせた。

「どうしたの？」

フェアリの視線の先をたどると、しばらくしてアンナが歩いてきた。手には籠を抱えている。フェアリの視線はその籠にくぎ付けになっているようだ。

アンナの誘いを断ったことが、セレムにはなんとなく気まずい。だが、アンナは気にすることなく、セレムに近寄って来た。

「こんに……！？」

アンナはセレムが抱えている竜の赤ちゃんに驚き、言葉を飲み込む。

「何よ、それ？生きてるの？」

「今日生まれたばかりの竜の子供だよ。山の中で見つけたんだ」

「竜の子供？……」

フェアリは、大きな目をくりくりさせてアンナの方へ首を伸ばす。

「気味悪いわ」

アンナが一步後ろに下がった時、フェアリはアンナが抱えていた籠の中に首を突っ込んだ。

「あっ……」

セラムが止める間もなく、フェアリは籠の中に入っていたケーキをほおばった。口を大きく開けてもぐもぐと美味しそうに食べる。

「もう！何すんのよ！」

アンナはフェアリから籠を引き離れたが、既にケーキの半分はなくなっていた。

「ごめん、まだ赤ん坊だから、何でも口にしてしまうんだ」

「せっかくセラムにケーキを作ってきたのに！」

「僕に？……それなら良いよ。フェアリが食べても」

セラムはほっとする。だが、アンナの機嫌は悪い。

「良くないわよ！……フェアリって？」

「この子の名前だよ。フェアリは僕の竜なんだ」

「セラムの竜？……セラムも竜使いになるってこと？」

「うん」

セラムは少しはにかんで微笑む。アンナには意外だった。セラムが竜使いになるなんて考えられない。いつも弱気なセラムだったのに、なんだかとても堂々として見える。急にセラムの態度が変わったような気がして、アンナは落ち着かない。セラムが自分の手の届かない所に行ってしまういそうな感じがする。

「ねえ、昨日あげた花飾りはどこに置いたの？」

アンナは話を変え、窓から部屋の中を覗いた。

「あれは……」

セラムは返事に困る。アンナに内緒でアリシアにあげてしまった。

「もう枯れちゃったよ」

「嘘、昨日摘んだばかりの花よ。他の花はまだ元気なんだから枯れるはずないわ」

「……」

見え透いた嘘をついてしまったセラムは、フェアリを抱いたままアンナに背を向ける。フェアリはまだケーキが欲しくて、手足をばたつかせていた。

「ごめん。ギルがもう一つ欲しかったからあげたんだ」

「……何よ、最初からそう言えればいいじゃない。何で嘘つくの？」
アンナは口をとがらせる。

「きつと、私が知らない竜使いにあげたんでしょ。私は知らない人だつて言つてたわよね。その竜使いと遊びに行つてたんだわ」

「凶星だった。だが、アリシアのことはアンナに話したくはなかった。セレムはもう一度アンナの方を向いた。

「……花飾りのことは、ごめん。でも、僕は竜使いになるつて決めたから、前のようにアンナと一緒にはいられない。竜使いの修行をしたいから、竜の谷に行くことが多くなると思ふんだ」
「……」

セレムにはつきりと告げられ、アンナは口ごもる。いつも一緒にセレムが自分から離れていく。アンナは、どうしようもない怒りがこみ上げてきた。

「何よ、竜使いなんて！……」

竜のフェアリは、アンナの方に手を伸ばしながら、セレムの腕の中で無邪気に鳴いた。『竜にセレムを取られた！』アンナはフェアリのことを憎らしく思う。ケーキの入った籠をフェアリめがけて投げつけ、アンナは走って帰って行った。籠はフェアリの体に当たり、中のケーキが床に飛び散った。その拍子に、フェアリもセレムの腕から床に落ちる。

「フェアリ！」

セレムは慌てるが、籠をぶつけられたフェアリは、痛がりもせず床に落ちたケーキに手を伸ばして食べ始めていた。

嫉妬（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回は謝ってばかりのセレムでした…（^^;）なんだか、浮気がばれちゃった！？みたいな感じになってしまいました。もちろんそういう関係ではありません。（^^;）

初飛行

翌日。竜の迎えを待っていたセレムは、クレスに乗ったアリシアが迎えに来たことに驚く。

「昨日はよく眠れた？フェアリはすっかりあなたに懐いてるようね」

「はい……」

フェアリはセレムの腕の中で眠っている。まだ赤ん坊の竜は、食べる時以外眠っていることが多い。

「どうかした？」

アリシアを見つめたまま突っ立っているセレムに、アリシアが聞く。

「あの、ギルが迎えに来ると思ったから……」

本当はアリシアに見とれていた。朝日を浴びて光る金髪とアリシアの笑顔が眩しかった。

「毎日ルピィが来るのは大変だからね。ルピィは長距離を飛ぶのはあまり得意じゃないのよ」

「そうなんだ」

ギルも竜で飛ぶのはあまり好きじゃないと言っていた。竜にも竜使いにも特徴や性質があるのだろう。

「フェアリは飛ぶのが好きになるかな？」

「そうね、それはあなた次第だと思うわ。飛ぶことの素晴らしさをよく教えて、体力もつけておくと良いわ」

セレムは、大きくなったフェアリに乗って空を飛ぶ姿を思い描く。竜に乗れば、世界中を旅することも出来る。アリシアが住んでいるという南の国にも行けるかもしれない。

「きつと好きになるよ。僕も竜で飛ぶのが好きだから」

「頼もしいわ。この子はクレスより逞しい竜になるかもしれないわね」

アリシアがクレスの長い首をさすると、クレスはゴロゴロと喉を

鳴らした。クレスの銀色の体も光りを受けて輝いている。

眠っているフェアリを籠の中にそっと入れて、クレスの背に乗せる。セLEMもクレスに乗った。クレスは大きく羽を広げると、ゆっくりと空に飛び立つ。

上空に上がると、ロバを引いて歩いているアンナと母親の姿が道に見えた。隣の町まで、花を売りに行っているようだ。アンナはセLEMの方を見上げている。

「あの子はセLEMの友だち？」

アリシアがアンナ達に気づき、下を覗く。

「ずっとこつちを見ているわ」

「……うん」

セLEMはアンナから視線を外した。アンナに悪かったと思うものの、大切なフェアリを傷つけようとしたことは許せなかった。

竜の谷に着いたセLEMは、小さなフェアリをコルバとギルに任せて、初めて1人で竜に乗ることになった。留守番をしていたルピイが、大人しく座ってセLEMを待っている。もう何度も竜には乗っているけれど、自分が操縦するのは初めてで緊張した。

「大丈夫よ、セLEM。飛ぶのはルピイに任せて、あなたは手綱を持って私についてくるだけでいいわ」

クレスに乗ったアリシアが微笑む。ルピイは体を低くし、小さく鳴いてセLEMを促した。

「うん……」

セLEMはゆっくりとルピイの背に乗った。自分の前に誰かの背がないと、いつもより視界が広く見えた。

「近くの湖まで行ってみましょうか。途中でシンとレナに会えるかもしれないわ」

そう言って、アリシアはクレスを誘導し、静かに地上を飛び立った。そして、上空に上がったところで止まり、セLEMを待った。

「ここまで、上がってらっしゃい」

セラムはやや緊張気味にルピイの手綱を引いた。

「ルピイ、飛んで」

ルピイは羽を羽ばたかせると、一声鳴いて空に舞い上がりクレスの横に並んだ。

「すごい！竜はちゃんと言うことを聞いてくれるんだ」

自分に従い竜が空を飛ぶことに、セラムは感動する。

「そうよ。竜との信頼関係が出来ていれば、竜と気持ちが通じ合えるようになるわ。竜と竜使いは一心同体、強い絆で結ばれているものだから。そのうち、竜もあなたの心を理解してくれるようになるわよ」

竜の気持ちが分かり、竜も竜使いの気持ちが分かるようになる。いつかフェアリとも、そんな関係になれるだろうか？セラムの夢は膨らむ。

竜に乗ったアリシアとセラムは、ゆっくりと空を飛んでいった。

湖にて

澄み切った静かな湖に、二匹の竜は並んで降りていった。遠くで聞こえる鳥のさえずり以外、聞こえるものはない。竜達が湖に降り立つと、透明な湖に波紋が広がった。

「セレムは竜の操縦が上手いわね。初めてとは思えないわ」

「ルピイが言うことを聞いて飛んでくれたからだよ。僕は何もしてないもの」

セレムが言うと、ルピイが小さく鳴いた。

「ルピイとも相性が良いみたいね。岸が上がってみましょう」

アリシアは微笑み、クレスを湖の岸に移動させる。セレムもその後が続く。

「ここで休んでいてね」

アリシアはクレスに声をかけると、岸边の森に降りた。森の中は木々が茂り、木漏れ日と湖からの風が気持ち良い。

「セレム、よく熟れたポームがたくさんっているわ」

アリシアは近くの木々に実を付けてるポームを指さした。

「ほんとだ」

セレムも岸に降り立ち、ポームの木々を見上げた。

「ポームの季節ももうじき終わりね。少し持って帰りましょうか」
「うん」

セレムはポームのなっている木から、真っ赤に熟れた実を採り、高い枝になっている実を採ろうと木に登った。

「セレムもポームが好きなの？」

アリシアはその様子を見て微笑む。

「え？……うん」

実を採ることに夢中になっていたセレムは、木の上からアリシアを見下ろし頬を染める。

「ラルフもとてもポームが好きだったわ。そうやって木に登ってよ

く採ってくれた」

「……アリシアは、よくラルフと遊んでいたの？」

「ええ、ラルフは私やシンのお兄さんみたいだった。色んなことを教えてくれたわ。横笛を作って吹き方を教えてくれたりしたの」

「横笛？……アリシアも横笛が吹ける？」

アリシアは首を振って笑う。

「私はダメ。シンはすぐに上達したみたいだけど」

「僕も。なかなか上手くならない……」

セレムはシンが横笛を吹いていたことを思い出す。ラルフとシンとアリシア、三人はセレムの知らない思い出をたくさん共有している。アリシアのことが羨ましくもあり、今もなおアリシアに慕われているラルフのことが羨ましくもあった。

「はい」

セレムはアリシアに木の上からポームを手渡した。

「ありがと。ラルフは竜の乗り方も上手かったわ。いつか、私の住んでる南の国にも行ってみたいって言ってた……」

アリシアはポームの実を少し嚙る。甘酸っぱいポームの味は、アリシアにとっても切ない思い出の味だった。

「……僕も、いつか行きたいな。アリシアの住んでる国」

はにかみながら、セレムは微笑む。

「フェアリが大きくなったら、乗って行きたい」

「楽しみに待ってるわ。私の国にはここよりたくさんの竜が住んでいるから、竜達も伸び伸びと生活しているの。竜の楽園みたいな所よ。……でも、セレムはこの国に住んでいてね」

「え？」

「この国に竜がいなくなっちゃったら寂しいでしょ」

「？……でも、竜の谷にはまだ三匹いるし、フェア리를産んだ竜もどこかにいるかもしれないよ」

「そうね。実は……」

アリシアが何か話しかけようとした時、空から竜のいななきと羽

音が聞こえてきた。セLEMが木の上から空を見上げると、シンとレナが竜に乗って湖に降りて来るところだった。

「クレスとルピイの姿が見えたから、寄ってみた。セLEMは1人でもここまで飛んでくれるようになったんだな」

竜を降りて岸に上がって来たシンが言った。

「ええ、もう1人でも大丈夫みたいね。さすがはラルフの弟だわ」
アリシアはシンを見て微笑む。

「あつ、いっぱいポームがなってる！採って帰ろうよ。ポームもそろそろお仕舞いだから」

レナはセLEMが登っている木を見上げる。

「おい、レナ。今日はもう充分採ったからいいだろ。竜達だって重くて運びきれないぜ」

竜のハーンとレピイの背には、既に籠一杯の木の实や山菜が詰まっていた。

「クレスとルピイに運んでもらえばいいさ」

「ちょうど私とセLEMもポームを採ろうとしてたのよ。みんなで採って帰りましょ」

アリシアはそう言って、食べかけのポームを頬張る。

「やれやれ、やっと帰れると思ったのにな。レナの収穫熱心には感心するよ」

「だって、あたし達の生活がかかっているんだからね」

レナは木の枝に腰掛けているセLEMを見る。

「ほら、ボケツとしてないで。ポームを採りなよ」

「あ、うん……」

もうしばらくアリシアと二人だけで静かに過ごしていたかった、と思うセLEMだが、レナにせかされポームの収穫に取りかかった。

大切なもの

「ギルや、今度は何を作っておるのかな？」

うとうととした眠りから覚めたコルバは、居間のテーブルで木を削っているギルに声をかけた。

「これはね、セレムへのプレゼント。出来上がるまで内緒だよ」顔を上げてギルが答える。

「ほおっ、ほおっ、それは楽しみじゃな」

コルバの膝の上で一緒に眠っていたフェアリも目を覚まして、大きく欠伸をする。

「フェアリも目を覚ましたね。そろそろ夕飯の準備しなきゃ」

ギルが立ち上がるとした時、フェアリが突然鳴きだした。そわそわしながら、窓の方に首を伸ばしている。

「おや、ご主人様が帰って来たようじゃな」

コルバは目を細めて、窓の外に顔を向けた。

「あっ、ほんとだ。みんな帰って来た！」

竜達の背に乗った籠が山菜や果物でいっぱいなのを見て、ギルは外に駆けて行った。

「すごいね！大収穫だ」

ギルはセレムを手伝って、ポームのいっぱい詰まった籠を運ぶ。

「ルピイには上手く乗れた？」

「うん。ルピイは言うことを何でも聞いてくれるから、とっても乗りやすかったよ」

「そう、良かった。なら、セレムに任せても大丈夫だね」

「え？」

と、近くでシンとレナの笑い声が聞こえた。レナは楽しそうに何かシンに話しかけている。

「レナはシンといるとよく笑うね。僕の前ではちつとも笑わないのに……」

セレムはレナに目を向ける。

「僕は嫌われてるのかな？」

「そんなことないよ。レナはいつもあまり笑わないもん。シンだけは特別なんだよ、きっと」

「特別？……」

セレムとギルはポームの籠を家の中に運んだ。セレムの姿を目にすると、コルバの膝の上のフェアリが身を乗り出して鳴きだした。

「おお、おお、お待ちかねのご主人様のお帰りじゃ」

「フェアリ」

セレムはコルバの元に行き、フェアリを抱き上げた。フェアリはセレムにしっかりとしがみつき、甘えた声で鳴く。

「フェアリは本当に可愛いわね」

アリシアも家に入って来て、その様子を見つめる。

「すぐに大きくなってしまうのが、ちょっと残念だわ」

アリシアはフェアリの小さな頭を撫でて微笑んだ。

「私にも抱かせて」

「いいよ」

セレムはフェアリをアリシアに渡す。フェアリは嬉しそうに鳴きながら、アリシアの胸の中に体を埋めた。

「セレムは最近よく笑うようになったの」

その様子を眺めていたコルバは、隣りに立っていたギルに言う。
「セレムも？」

ギルはさっきのセレムとの会話を思い出す。

「そうだね。セレムも自分の竜が出来てよかったよね」

「ほおっ、ほおっ、セレムが明るくなったのは、それだけじゃないと思うがの」

コルバは目をいつそう細めて笑う。

「愛の力は偉大じゃな」

コルバは、セレムが笑顔でアリシアに話しかけているのを、満足そうに見つめた。

アリシアにあげたアンナの花飾りは、まだ綺麗に咲いている。壁に掛けていたその花飾りに、アリシアは霧吹きで水をかけていた。

「こうしておけば、まだまだ枯れないわ。作り方が上手いから長持ちそうね」

「……」

セレムの心が少し痛んだ。アンナが心を込めて作ってくれた花飾りを、簡単に手放してしまった。「もう枯れた」と嘘までついてしまった。

「どうかした？」

黙り込んだセレムに、アリシアは言う。

「うっん、何でもない……」

水を浴びて元気に咲いている花を、セレムは複雑な気持ちで見つめた。

大切なもの（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回、場面の切りかえが多かったんで、ちょっと分かりづらいところもあるかもしれません。（^^;）少し余白を空けました。もうそろそろ先が見えてきたんで、ラストに向けて頑張ります！

花束

連なる山々の上を、ゆつくりと竜に乗って飛んでいく。初飛行から数日後、セレムはルピイに乗り1人で飛行することが多くなった。竜の飛行にもすっかり慣れてきた。ルピイが背負った籠の中には、フェアリが入っている。フェアリも少し大きくなってきて、籠が手狭になりつつある。

「あの山に降りてみよう」

ルピイに声をかけ、眼下の山の頂に下降していく。そこは、周りの山々より一際高い場所だった。他の山が緑色の海のように、その山を取り囲んで広がっている。

籠から出たフェアリは、小さな羽をパタパタさせて、ピョンピョンと飛び跳ねた。

「フェアリ、崖から落ちないように気をつけるんだよ」

近頃のフェアリは、あちこち歩き回るようになり目が離せられない。セレムはルピイから降りて、フェアリの後を追う。クウクウと鳴きながらはしゃぐフェアリは、岩につまずいて転んだ。

「危ない！」

セレムは走り寄ってフェアリを抱き上げた。もう少しで崖から落ちるところだった。そんなことを気にすることもなく、フェアリはセレムの腕の中で両手足と羽をばたつかせる。セレムはよろめいて、その場にドシンとしりもちをついた。体重も増え重くなってきたフェアリに暴れられると、とても支えきれない。

「痛っ……」

立ち上がるうとした時、岩の向こう側に白い小さな花がたくさん咲いているのが見えた。顔を近づけると、甘い香りが漂ってくる。

「フェアリみたいに真っ白な花だね」

セレムは可憐な白い花を見て微笑む。

「少し摘んで持って帰ろうか……」

セレムの頭の中にアリシアの笑顔が浮かぶ。花が好きだと言っていたアリシア。清楚な白い花は、アリシアによく似合う。セレムは白い花に手を伸ばした。

白い花の花束を作って、セレムは竜の谷に戻って来た。ルピイを着地させると、家の中からギルが出てきた。

「セレム、お帰り！今日はどこまで行って来たの？」

「近くの山まで。綺麗な花が咲いてたよ」

籠の中のフェアリが羽をばたつかせて、ルピイから降りた。そのままピョンピョン跳ねてギルの元まで歩いて行く。ギルのところに行けば何か美味しい物が食べられるという習慣が、すっかり身につけてしまった。

「フェアリ、お腹空いたの？」

ギルが聞くと、フェアリは甘えた声で鳴いた。

「フェアリは食いしん坊だな。この頃一日中何か食べてる気がする」セレムは軽いため息をつく。

「竜の子は大きくなるまでよく食べるんだよ。それだけ早く大きくなれるんだ。おいで、フェアリ」

ギルの後について、フェアリは嬉しそうに鳴きながら飛び跳ねていく。

「あつ、アリシアはどこ？」

歩いて行くギルにセレムは聞く。

「アリシア？ああ、森の方へ行つたみたいだよ」

「ありがとう」

セレムは白い花の花束を掴むと、森の方へ駆けていった。

昼下がりの森には、木漏れ日が優しく降りそそいでいる。手に持つ花束が揺れる。セレムは、はやる心を抑えつつ、森を走って行った。

しばらく行くと、木々の向こうからアリシアの笑い声が小さく聞

こえてきた。軽やかな笑い声は、木々に反射して木霊する。誰かと一緒なんだろう？セレムは立ち止まり、木の陰に隠れてそっと覗いてみた。

「……」

そこには、アリシアとシンがいた。2人は向かい合って、楽しそうに話している。セレムは花束を握りしめた。2人の姿は木漏れ日の光りの中で、あまりに眩しく映る。セレムはアリシアに声をかけることが出来なかった。ふと、アリシアとシンの会話がとぎれ、森の中を静寂が流れる。

「！……」

セレムは息を呑んだ。美しい光りの中で、アリシアとシンはそつと口づけを交わしている。胸が高鳴る。セレムは身動きすることが出来なかった。

「帰ろう……」

固まったセレムの腕を、突然誰かが引っ張った。セレムはビククリして振り返る。

「何、覗き見てんだよ」

そこにはレナが立っていた。レナはセレムの腕をグイッと引っ張る。

「……」

セレムは黙ったままレナについて行った。

「あんたも失恋したんだね」

しばらく森を歩いた後、レナがぶつきらばうにボソツと呟いた。

「……僕も？」

恋という意味さえよく分からないセレムには、失恋なんてことはもっと分からない。ただ、アリシアとシンのキスは衝撃的で、セレムの心がズキズキと痛んでいる。

レナは足早に、セレムを置いてさっさと歩いて行く。セレムは手に持っていた花束を見つめると、レナの元まで駆けていった。

「これ、あげるよ」

セレムは渡し損ねた花束を、レナに差し出す。レナはそれを見てムツとした。

「知らない！失礼だよね、あんたって」

「？……」

セレムは何故レナが怒ったのか分からなかった。それより驚いたのは、レナの瞳に涙がいつぱい溜まって、今にもこぼれ落ちそうだったこと。

「ごめんなさい……」

セレムは訳が分からず謝った。レナが涙を見せるなんて考えられない。

「バカ！」

レナは、セレムに背を向けたまま走って行った。

「……」

光を受けて白く輝く白い花が、セレムの目には悲しく映った。

花束（後書き）

読んで下さってありがとうございました！

今回、初めて2000文字を超えました。どこで区切っていいか分からず、いつもよりちよつとだけ長くなりました。ラブシーンを書くのは照れます…（＊＾－＾＊）その後、2人はどうなったのでしよう？自由に想像してください。（＾－＾；）

悪戯

翌日の朝。

霧の立ちこめる竜の谷に、ルピイに乗ったギルがゆつくりと降りてきた。部屋の窓からその様子を見ていたレナは、ギルが1人で戻って来たのを不思議に思う。寝起きのまま、レナは部屋を出た。

「セレムを連れに行ったんじゃないの？」

家に入って来たギルにレナは聞く。

「今日は家の仕事があるから来れないんだって。せっかく迎えに行つたのにな」

「……」

セレムも今日はアリシアに会いたくないんだと、レナは思う。同じ家に住んでいれば、どうしても会わなければならないけれど、レナも昨夜はシンやアリシアと目を合わせられなかった。

「どうかしたの？なんか昨日から元気ないよね」

「別に……」

「あつ」

ギルはレナの顔をまじまじと見る。

「なんだよ？」

「目が腫れてるよ。虫に刺された？何かにかぶれたの？」

「えっ?!……」

レナはギルから顔をそむける。まだ鏡も見えていない。きっと、昨日泣きながら眠ったせいだ。

「良く効く薬草があるからつけてあげる」

「何でもない！」

ギルから逃れ部屋に戻ろうとしたレナは、テーブルの上に白い花が飾られているのに気づく。昨日、セレムが持っていた花束だ。

「これ、どうしたの？」

「ああ、綺麗な花でしょ？昨日セレムにもらったんだ」

ギルは花瓶に生けた花を見て微笑む。

「アリシアも珍しい綺麗な花だって、すごく気に入ってた」

「ふーん……」

セLEMがアリシアにあげようとしていた花。届けたい人の元に届かなかった花を、レナは悲しく思う。まるで、シンに届かなかった自分の思いのようで切ない。レナは、セLEMに冷たく当たったことを後悔した。

その頃セLEMは、フェアリを連れて草原の丘に来ていた。

家の仕事など、本当はなかった。わざわざ迎えに来てくれたギルに嘘をついたことを悪く思ったが、どうしても今日はアリシアに会いたくなかった。

朝露で濡れた草の上を、フェアリと一緒に歩いて行く。朝はだいぶ肌寒くなってきた。秋も深まり、もうじき季節は冬へと移っていく。村に初雪が降る日もそう遠くないはずだ。

フェアリはピョンピョンと飛び跳ねながら、セLEMの前を歩いて行く。セLEMの沈んだ心など知る由もないフェアリは、広い草原を元気に飛び跳ねる。時々、元気が良すぎて、何度も滑り転げた。それでも気にすることなく立ち上がり、また小さな羽をパタパタさせて歩く。その様子を見てみると、セLEMの口元が弛んでくる。フェアリが側にいるだけで、心が癒され元気が沸いてくる気がする。今やもうフェアリは、セLEMにとってなくてはならない存在となっていた。

フェアリと一緒に丘を登って行くと、アンナと母親が薬草を摘んでいる姿が見えた。傍らには大きな籠を背負ったロバがいる。ここ数日、アンナとは全く会っていないかった。アンナはセLEMに気づき、顔を上げた。セLEMは立ち止まる。

「……おはよ」

ためらいがちに声をかけたが、アンナはツンとすまして何も言わなかった。そのままアンナが草を摘もうとした時、フェアリがピョ

コピョコ飛び跳ねながら、アンナの元まで歩いて行った。

「あつ！何すんのよ！」

フェアリはアンナが薬草を入れていた籠に、頭を突っ込んでいる。またケーキの御馳走が貰えるんじゃないかと、籠の中を頭で探り、籠をひっくり返してしまった。セLEMは慌てて、フェアリの元まで駆け寄りフェアリを抱き上げた。

「ごめん」

「もう！いつも邪魔ばかりするんだから！」

アンナは、辺りに散らばった薬草を見て怒る。

「また籠の中にケーキが入ってるかと思ったんだよ」

セLEMの腕の中でフェアリはもがき、まだ籠の方に首を伸ばしている。

「本当に行儀が悪いわね！」

アンナはフェアリを睨み付ける。

「もう近づけさせないようにするよ……」

セLEMは籠を気にしているフェアリを抱きかかえながら、アンナの元から離れていった。

「……」

しばらくその後ろ姿を黙って見つめていたアンナは、突然立ち上がるとセLEMの方へ走って行った。

「セLEM！」

セLEMは立ち止まり、振り返る。

「？……」

「あの、怒って悪かったわ。その竜はまだ赤ん坊だものね」

アンナはフェアリを見て、ぎこちなく笑った。

「……後で、フェアリを連れて家にいらっしやいよ。セLEMとも仲直りしたいから、その子の好きなケーキ作って待ってるわ」

「……ありがとう」

「午後のお茶の時間にはきつと来てよ。待ってるから」

アンナはそう言って念を押すと、走って行った。

「……」

急にフェアリに優しい態度をとるアンナを不審に思いながらも、セレムはアンナの好意を断ることは出来なかった。時に酷く我が儘なアンナだが、セレムにとって大切な友だちだ。

悪戯（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回、初めて季節のことを書きました。（^^;）今日は真夏ですが、ストーリーの都合上秋の終わりということにしました。季節のことも最初から書いておけば良かったなあと思います。

嘘

午後のお茶の時間に、セLEMはフェアリを連れてアンナの家を訪ねてみた。アンナの家はセLEMの家の隣だが、隣りと言ってもかなりの距離があり家の屋根さえ確認出来ない。アンナの家は、草原を流れる川を渡った場所に、ポツンと建っている。

フェアリはセLEMの前をピョンピョン飛び跳ねながら、家の前に架かっている小さな橋を渡っていく。

橋を渡ると、風に乗って香ばしい甘い香りが窓から漂ってきた。

「こんにちは」

セLEMが声をかけると、待ちかまえていたようにドアが開いて、アンナが姿を現した。

「ちょうどケーキが焼けたところよ。入って」

アンナは笑顔でセLEMを迎え入れた。部屋に入ると、ケーキの焼けた良い香りが一層広がる。

「おばさんは？」

「ママはお昼から出かけて行ったわ」

アンナの父親は、遠い街に働きに出ている。年に数回しか帰って来ないため、いつもは母親と2人暮らしだ。セLEMが住んでいる小さな村では、農業をしない人々の多くは遠い街に働きに行っている。村に残ったアンナと母親は、花や薬草を売って暮らしていた。部屋にはアンナ達が摘んだ花が、あちこちに飾られていた。

テーブルの上には、野いちごのケーキとお茶が用意されている。フェアリは、鳴きながら羽をパタパタさせて、テーブルの上を気にしている。さつきから漂ってくるケーキの甘い香りに我慢できない様子だ。テーブルの上まで飛べないことが、もどかしいらしい。

「フェアリ！」

セLEMは、またフェアリがケーキを台なしにするんじゃないかと思いい、気が気ではなかった。アンナは、そんなフェアリを一瞥した

だけで、何も言わなかった。

「セラム……」

ふと、アンナは口を開いた。

「ウィルおじさんが、後で寄って欲しいって言ってたわ。頼みたいことがあるんだって」

「父さんが？……」

ウィルはいつもアンナの家近くで、牛達を放牧している。アンナの家の近くには、牛達が好む草がたくさん生えていた。

「何だろ？」

「急いでないみたいだったから、お茶の後でいいんじゃない？」

言いながら、アンナはケーキをカットする。

「……」

何でもないように言うアンナだが、セラムは余計に気になった。

「すぐ近くだから、ちよつと行って来るよ。フェアリ、おいで」

セラムは、ケーキに夢中になっているフェアリに声をかけた。

「あ、いいわよ。この子には先に食べさせてあげるわ。もう我慢できそうもないみたいだし」

アンナは、さっきより羽を激しくばたつかせて飛び上がっているフェアリをみて、苦笑した。

「そうだね……じゃ、すぐ帰って来るから」

セラムはフェアリのことも気になったが、そう言うと急いで家を出ていった。

「……」

アンナは、セラムがパタンとドアを閉めて出ていくのを確認すると、ケーキをカットする手を止めた。

「そんなにケーキが食べたい？」

アンナは、飛び跳ねてはしゃいでいるフェアリをじつと見つめた。

嘘（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

なんかあやし〜い、アンナです。（^^;）ふと、ミステリーを書きたい気持ちになりました…（夏だし）今回短めなのに、暑さでバテ気味でかなり時間がかかりました。暑さに負けないよう頑張ります。

消えたフェアリ

牛達が草を食んでいる丘を目指して、セレムは駆けていった。父親のウィルは、いつものように大きな木の元に腰を下ろして休んでいた。

「父さん！」

セレムが呼ぶと、ウィルは顔を上げてセレムの方を見る。セレムはそのままウィルの所まで走って行った。

「頼みたいことって何？」

息を切らせながら、セレムは問う。だが、ウィルはきょとんとした顔をして、

「頼みたいこと？……」

と、逆に聞いてきた。

「アンナから、父さんが僕に用があるって聞いて……」

「そんなこと言ってないぞ。お前が慌てて走ってくるもんだから、こっちこそ何かあったのかと心配したじゃないか」

「？……」

困惑した顔をして、肩で息をしているセレムを見て、ウィルは笑った。

「アンナに担がれたな。お前が最近竜にばかり夢中になるもんで、アンナが意地悪したんじゃないのか？」

「……」

ウィルは可笑しそうに笑っているが、セレムは急にフェアリのこととが心配になってきた。アンナはまだフェアリのことを許していない。フェアリのことを嫌っている。そう考えると、気が気でない。

「アンナに聞いてみる」

そう言つと、セレムはきびすを返し急いで丘を下って行った。

「アンナ！」

心臓をドキドキさせながら、ボタンツとドアを開ける。胸の鼓動は、走ったせいばかりではない。大きく膨らむ不安のせいで、一層高まっている。

「!……」

家に踏み込んだセレムは、その場に立ちつくした。不安が的中した。

家の中には、アンナもフェアリもない。テーブルの上には、ティーカップがセットされたままでケーキも半分残っていた。

「フェアリ!」

セレムはテーブルの下を覗いたり、他の部屋も探してみるが、フェアリの姿はどこにもなかった。アンナがどこかにフェアリを連れて行ったのは間違いない。アンナはフェアリをどうしようというのだろう? 食いしん坊のフェアリは、ケーキにつられて簡単にアンナについて行ったに違いない。一体何処に?

「!……」

セレムがアンナとフェアリを探しに行こうとした時、玄関のドアが勢いよく開いた。

「まあ、良い香りがするわね。ケーキの焼けた匂いだわ」

高らかな声と共に、アンナの母親が帰って来た。

「あら? セレム、来ていたの」

アンナの母は、セレムに気づき笑顔を向ける。

「アンナったら、友だちを置いてどこに行こうとしてたのかしら……小さな竜まで連れて」

「竜!? おばさん、アンナと竜を見たんですか?」

「ええ、森の方へ向かったようだね。もうすぐ暗くなるから呼びとめようとしたんだけど、あの子ったら急いでて私に気づきもしなかったのよ」

「!……」

セレムはアンナの母親の横をすり抜けると、家を飛び出した。

「セレム、何処へ行くの? お茶に来たんじゃないの?」

もう、アンナの母親の声などセレムの耳には入らなかった。セレムは夢中で駆けていく。日暮れが近いこと、空の雲行きがあやしくなってきたことなど、セレムは気にもならなかった。

暗い森で

霧の立ちこめる薄暗い森の中を、セレムはひたすら走って行った。
「アンナ！フェアリ！」

白い霧がかかり、辺りの様子が見えない森に向かって叫ぶ。まだそんなに遠くへは行っていないはず。何度も通り慣れている森なのだが、進むに連れて方向が分からなくなりそうだった。

セレムは立ち止まった。日の当たらない森の中は、ずいぶん寒くなってきた。

「アンナ！フェアリ！」

セレムはもう一度森に向かって声を上げた。静かな森にセレムの声がこだまする。だが、森は静寂を保ったままだった。このまま進んだら、道に迷って森から出られなくなるかもしれない。もうすぐ日が暮れて、夜になってしまう。

「……」

引き返して村の人達の助けをかりた方が良いかもしれない。セレムが考えていると、ポツポツと雨粒が木々の上から落ちてきた。

「フェアリ……」

この瞬間にも、フェアリはどこかで寒さに震えている。アンナは森で迷ってしまったんじゃないだろうか？セレムの不安は募っている。早く探し出さなければ！

雨足が強くなってくる森の中を、再びセレムは駆けだした。

「アンナー！」

声を限りに叫びながら森を進んで行くと、雨音に混じって何か聞こえてきた。

「アンナ！」

更に歩いて行くと、足元の方で声がした。

「セレム！助けて！……」

声のする方に目を向けると、急な下り坂になっている足場に滑った後があった。セラムが上から覗くと、坂の下にアンナが座り込んでいた。アンナは泣きながら足首をさすっている。降りしきる雨で、全身ずぶ濡れだ。

セラムは滑らないよう注意しながら、アンナの元まで降りていった。

「フェアリはどこ？」

アンナは泣きじゃくりながら、首を振った。

「急に霧が出てきて、道が分からなくなって……そしたらフェアリと一緒に滑って転んだのよ。そのままフェアリはどっかに行っちゃったわ」

「なんでフェアリを連れて森に行っただよ？！なんで嘘ついたんだ！」

フェアリがいなくなったことの焦り、アンナに対する怒りがこみ上げてくる。

「絶対許さない！このままフェアリが見つからなかったらどうするんだ！」

滅多に怒らないセラムのきつい表情にアンナは怯える。

「だって、セラムはフェアリのことばかり……竜の谷に行つてばかりなんだから！あたしのことなんかちつとも構ってくれないんだもん！フェアリなんていなくなれば良いと思ったのよ……」

アンナはしゃくり上げながら、思いをぶちまける。

「足をくじいて歩けない……お願い、家まで連れて帰って……」

「！……」

勝手にフェアリを連れ出したアンナは許さない。今更泣き言を言っても、自業自得だ。それより、フェアリは今頃雨に打たれ、寒さに震えているかもしれない。早くフェアリを探しに行かないと。

セラムはアンナを置いたまま、森の奥に進もうとした。雨は一層激しく降り始め、体を打ち付ける。

「行かないでよ！……１人にしないで……」

アンナは雨に打たれて泣きじゃくる。顔は青ざめ、寒さのため体が震えていた。いつもの元気で強きなアンナの面影はなく、とても小さく弱々しく目に映る。

「……」

セレムは数歩進んだ所で引き返し、アンナに手を差しだした。

「立てる？……」

アンナは涙を手で拭うと、セレムの手に乗まって立ち上がった。

足首がズキンと痛んだが、どうにか歩くことは出来た。

「足が痛い……」

「我慢して村まで歩こう」

アンナはセレムに支えられながら、森の道を歩いた。ずっとうつむいたまま、「ごめんなさい」と繰り返し涙を流していた。セレムは硬い表情で、黙々と歩いて行く。雨は容赦なく2人の体を叩き続けた。

暗い森で（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

もう後少しのところで、なかなかストーリーが進みません…暑さで頭の回転が悪くなってます。暑さのせいにならず、執筆も頑張らなくては！でも、暑い。^^;;^^;;

「フェアリ〜！」何処にいるの？（^^;;）

雨に打たれて

霧の立ちこめる薄暗い森を引き返し、どうにか森の入り口までたどり着いた。日は既に沈み、夜の闇が降りてこようとしている。雨足も激しくなり、セレムもアンナも水に浸かっていたかのようにずぶ濡れになっていた。

「……もう歩けない」

足を引きずって歩いていたアンナは、傷みに耐えかねて立ち止まる。アンナの足は寒さと痛みのため、感覚が麻痺してしまいそうだった。体はブルブルと震えている。気温は一層下がってきたようだ。「もう少しだから歩こう」

セレムがアンナの腕を引き歩こうとした時、前方にチラチラと揺れる明かりが見えた。明かりはだんだんと近づいて来る。

「母さん！」

カンテラを下げたアンナの母親が、こちらに向かって来るのが見えた。その姿を確認すると、アンナは足の痛みも忘れて走り寄って行った。

「アンナ！こんなに濡れて何処に行ったの？森の方へ行ってたみたいだから、心配したんだよ！」

雨具を羽織った母親の胸にアンナは飛び込み、わあわあと声を出して泣いた。母親は、アンナにも持ってきたコートを掛けてやった。「さ、早く帰るよ」

「待って、セレムが……」

手で涙を拭い、アンナは後ろを振り向いた。

「セレム！？」

その時アンナの目に、森に向かって走って行くセレムの後ろ姿が映った。

「待ちなさい！夜の森は危険よ！こんなに天気が悪いんだから！」
アンナの母も驚いて叫んだが、セレムは振り返らずそのまま森に

入って行く。

「セレムー!!」

悲鳴に近いアンナの叫び声も、セレムの耳には聞こえない。やがて、セレムは暗い森の中へと消えていった。

セレムの頭の中には、フェアリのことしかなかった。夜の闇も激しい雨も凍える寒さも、セレムには気にならない。フェアリを失うことの方が、もっと恐ろしかった。

雨でぬかるんだ道を走り、ようやくアンナとフェアリが滑って転んだ場所まで辿り着いた。急な坂を下り、辺りを見回す。日が暮れて、もうほとんど辺りは暗闇に包まれていた。

「フェアリ!」

森の闇に向かって声を上げながら、セレムは更に奥へと進んでいった。と、遠くでゴロゴロという雷の音がして、セレムは立ち止まる。まだ、雷の恐怖が消えたわけではない。セレムの心臓はドキドキと高鳴っていった。ここは、ラルフとコーリーが死んだ森……。

「……」

セレムの体は、寒さと雷の恐怖のため震えた。

「……フェアリを探さないと。フェアリを見つけるんだ……」

そう自分に言い聞かせて、セレムはまた歩き始めた。

更に森の奥に進んでいくと、木々が一層茂ってきて足場もかなり悪くなっていた。山へと続く坂道から、雨水が川のように流れ出している。一步一步踏みしめて歩いても足を取られてしまいそうだ。その時、ピカッ!と稲妻が光り暗い森の中が一瞬明るくなった。ビクッとして立ち止まったセレムの耳に、凄まじい雷の音が響く。
「ワアー!!!」

両手で耳を塞ぎ身がかがめた瞬間、バランスを崩しぬかるみに足を取られた。そのまま、ズルズルと坂道の下に転がっていく。雷はまだ鳴っていた。地面に打ち付けられた体の痛みより、雷の方が気がかりなセレムは、倒れ込んだまま耳を塞いだ。泥だらけになっ

たセレムの体には、冷たい雨がなおも打ち付ける。

寒さと傷みと恐怖で、意識が遠のきそうになった時、ふとセレムの顔の近くに何か温かいものを感じた。

「……？」

震えながらそっと目を開いてみると、目の前に円らな大きな二つの瞳があった。じっとセレムを見つめて、小さな声で鳴いている。

「フェアリ？！」

フェアリは小さな舌を出すと、ペロペロとセレムの顔をなめた。

セレムは半分身を起こし、フェアリをギュッと抱きしめた。

「良かった！フェアリ！無事だったんだね」

セレムの顔がぱっと笑顔になる。あまりに強く抱きしめたせいで、フェアリはセレムの腕の中でもがき、羽をパタパタさせた。

「帰ろう、フェアリ、みんな心配してるよ」

嬉しさで笑いながら、フェアリを抱いたまま立ち上がろうとしたが、足に力を入れたとたん両足に激痛が走った。右足からは血が滲んでいる。セレムは傷みに顔を歪めて足をさすった。

「……ダメだ。歩けそうもないや……」

セレムの顔から笑顔が消える。寒さで体中がガチガチと震えた。

フェアリを見つけた喜びもつかの間、寒さと恐怖に加え、足の痛みもセレムを襲う。

フェアリは、心配げにセレムの顔を覗き込み、またペロペロと舌でセレムをなめて、クウクウと鳴いた。

「大丈夫……フェアリがいるから恐くないよ」

また鳴り出した雷に怯えながら、セレムはそっとフェアリを抱きしめた。

雨に打たれて（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

毎回、一話の長さが長くなったり短くなったりしてます…（^^;）
今回は二日かかり、一度書いたものを何度も修正しました。ようやくフェアリと再会！でもまだまだ試練はあるのです。セラム頑張り！（ちょっといじめすぎてる気が…^^;）最後の山場。後少し、かな？

幻影

どれくらいの時間が経ったのだろうか？雨はまだ激しく降り続いているが、雷の音はしなくなつた。日はすっかり暮れて、辺りは真っ暗だ。凍えそうになるくらい寒い。

抱いているフェアリの体温で、どうにか持ち堪えているが、セレムの意識はだんだんと薄れていった。足からの出血はだいぶ治まってきたが、痛みはどんどん増している。

「……フェアリ……」

セレムはフェアリの体を弱々しく撫でた。

「なんだか眠くなつてきたよ……」

フェアリを撫でるセレムの手が止まり、だらんと地面に落ちた。フェアリは心配そうにセレムを見つめ、鳴き続ける。

薄れゆく意識の中で、セレムは雨音とフェアリの鳴き声を遠くで聞いた。やがて、意識は真つ暗な世界へと落ちていく……

「……レム、セレム」

しばらくすると、耳の側から誰かの声が聞こえてきた。懐かしい声の響き。温かく優しい感触。セレムは目を開けようとしたが、瞼は意志に反して開かなかつた。

「セレム、また森に遊びに来たのかい？夜の森には来ちゃいけないつていつも言っているだろ。特に雨が降る日はダメだよ」

「ラルフ？……ラルフ、僕を迎えに来てくれたの？」

目は固く閉じられたままなのに、セレムにははっきりとラルフの姿が見えた。ラルフの隣りにはコーリーもいる。雨の降る夜の森のはずなのに、ラルフとコーリーのいる場所は光りに包まれ昼間のように明るい。

「ラルフ兄さん、会いたかつた！コーリーも元気そうだね」

ラルフは優しく微笑んでいた。

「ラルフ、もつと側においでよ。コーリーにも乗りたい」

ラルフの声は耳のすぐ近くから聞こえるのに、ラルフもコーリーも距離を置いた場所に立っていて近づこうとはしない。

「……僕とコーリーはもう行かなきゃ」

「何故？何処に行くの？僕も一緒に行くよ」

ラルフは静かに首を振った。

「お前はまだダメだ……ほら、小さな竜がお前を待っている」

「え？……」

フェアリの姿はセLEMには見えなかったが、竜の小さな鳴き声が聞こえた。

「セLEM、大きくなったな。もう立派な竜使いだ。十年経ったら竜使いになれるって言ったのは、嘘じゃなかっただろ」

ラルフとコーリーの姿がだんだんと薄れ、光りの中に消えそうになる。

「待つて、ラルフ！ずっとずっとラルフに謝りたかったんだ。ごめんなさいラルフ、みんな僕のせいなんだ。僕が森にさえ行かなければ……」

セLEMの瞳から涙が溢れた。ラルフは黙って微笑んでいる。

「気にするな、セLEM。お前のせいじゃない」

コーリーのいなくなきと共に、ラルフの姿は静かに消えていった。

「ラルフ、待つて！」

「心配しないでいい。僕とコーリーはいつもお前の側にいるから……」

……

どこかからラルフの声が響き、やがて消えていった。

「ラルフ……」

セLEMの意識は、また暗い世界へと落ちていく……

「セLEM、セLEM」

誰かが名前を呼んでいる。誰だろう？ラルフ？否、ラルフじゃない。瞳を閉じたままでも、周囲が明るいのが分かった。体を打ち付

けていた雨の感触もなくなっていた。だが、寒さと足の痛みはまだ続いている。

「セレム、セレム」

もう一度誰かが名前を呼んだ。セレムは、重い瞼をゆっくりと開けた。

静かな夜明け

眩しい光りが目に飛び込んでくる。頭上には木々の枝と葉が揺らめき、葉と葉の間から木漏れ日が差し込んでいた。

「……やつと気がついた」

声のする方へ目を向けると、そこにはレナが立っていた。そのすぐ側には竜のレピイがいる。レナはほっとした様子で微笑んだ。

「その体の葉っぱどけて、これを羽織りなよ」

「葉っぱ？……」

セレムの体の上には、大小の木の葉がかけられていた。葉っぱをくわえたフェアリが、セレムの周りをピョンピョン飛び跳ねている。「フェアリがかけてくれたんだね？」

セレムは上半身を起こし、葉を取り除いた。寒さしのぎにはならなくても、フェアリの精一杯の気遣いが嬉しかった。

「足は痛む？」

レナはセレムに毛布を渡しながら、セレムの足をそっと触った。

「うん……昨日からずっと痛む」

「傷は深いようだけど、骨は折れてないみたいだよ」

「あの……」

セレムは、この場所にレナがいることを不思議に思う。

「どうしてここに？」

「今朝早くあんたの家に行ってみたら、森で行方不明になったって騒いでたんだよ。夜明けと同時に村の人皆で探しに行くんだって言うってた。だから、あたしは一足先にレピイで森に来てみたんだ」

「……ありがとう」

「あたしはギルに言われて、たまたまあんたを迎えに來ただけだから……」

レナはそっけなく言うと、セレムから視線を外して立ち上がる。「ここの森ってかなり深いから、空からだとなかなか見つからない

と思ってたんだ。そしたら、何か鳥のようなものがスツと現れたんだよ。遠くの方でよくは見えなかったけど、白っぽくて光りに包まれてた。それは、竜のようにも見えたよ」

「竜？……」

「もちろん、この近くに竜なんているわけないけどね。その光りが気になって後を追いかけてみたら、光りの消えた下にあんたがいたんだ」

「……」

もしかして、それはラルフとコーリーだったのではないだろうか？夕べのことが思い出される。ラルフはいつも側にいて、見守っていると言った。あの言葉は嘘じゃなかった。そう思うと、凍えた体までも温かくなるような幸せな気分になった。

その時、森のあちこちから村人達の声が聞こえてきた。

「セレムー！セレムー！」

「セレムはこつちだよ！早く来て！」

レナは木霊する声に向かって叫んだ。その声を聞いて安心しきったセレムは、もう一度まどろみの中に落ちていった。

次にセレムが目覚めたのは、柔らかく温かい自分の部屋のベッドの中だった。足の痛みも消えていた。セレムは横になったまま、窓に目を向けた。窓から差す光は既に傾きかけている。かなり長い間、セレムは眠り続けていたらしい。

ベッド脇のテーブルの上には、鮮やかな美しい花が生けられてあった。甘く柔らかい香りが漂ってくる。

その時、部屋のドアが静かに開いて、母親のメーシーが入ってきた。メーシーはセレムが目覚めているのを見て、ほっとした笑みを浮かべた。

「良かったわ……あまり長く眠ってるから、このまま目を覚まさないのかと思った。気分はどう？」

「悪くはないよ」

セラムはベッドの上に身を起こした。

「レナはもう帰ったの？」

「ええ、あの子のお陰で早くあなたを探し出すことが出来たわ。明日また様子を見に来てくれるそうよ」

と、開いたドアの隙間から、フェアリが飛び跳ねながら入って来た。フェアリは勢いよくジャンプすると、セラムのベットに飛び乗った。

「あつ、ダメよ！セラムの足の上に乗っちゃ」

メーシーは慌ててフェアリを下ろそうとするが、フェアリはしっかりとセラムの腕の中に収まった。

「大丈夫だよ」

セラムは腕の中のフェアリを抱きしめて頬ずりした。フェアリも嬉しそうにクウクウと鳴いた。

「本当に、あなたは竜のことになると夢中になってしまっんだから

……」

メーシーは軽くため息をつく。

「まるで……ラルフのようだよ」

メーシーは抱き合うセラムとフェアリを見つめながら、口元を弛めた。

「……母さん、ラルフとコーリーは、いつも僕達を見守ってくれてるから」

セラムはメーシーを見ながら静かに言った。

「え？……」

「兄さんは、いつも僕達の側にいてくれるから、寂しくないよ」

「……ええ、そうね」

メーシーはセラムの言葉に瞳を潤ませた。

和解

大きな振動を感じて、セレムは目を覚ました。見るとベッドの上で、フェアリが飛び跳ねている。フェアリが跳ねることに、ベッドは大きく浮き沈みした。セレムは大きく伸びをすると身を起こした。昨日はほとんど眠って過ごしたが、お陰ですつか元気を取り戻してきた。

「フェアリ！やめろ、ベッドが壊れる」

体重も増え力も増してきたフェアリが元気良く跳ねると、ベッドは悲鳴をあげているかのようにギィギィと鳴った。フェアリは羽をパタパタさせて、ベッドの下に着地し、鳴き声をあげた。

「どうかしたの？」

フェアリはそわそわした様子で、窓辺まで跳ねていった。セレムはベッド脇に立てかけていた杖にもたれながら、ゆっくりと立ち上がった。傷の痛みはなくなったが、完治するには一週間くらいかかるらしい。それまでは杖の力を借りなければならない。セレムが窓を開けて外を眺めてみると、空から竜のルピイが降りてくる姿が見えた。ルピイの背には、ギルと珍しくコルバが乗っていた。

「ほおほお、久しぶりに竜に乗ってみた方がいいもんじゃの。セレムの怪我也思ったより軽そうじゃ」

セレムの家に案内され、ゆっくりと椅子に腰を下ろしながらコルバが言った。

「セレムの村もセレムの母君も美しいわ」

メーシーはコルバとギルにお茶を入れながら微笑んだ。

「竜使いには、あなたのような年輩の方もいらっしゃるんですね？」

「コルバ爺さんはとくに現役を引退してるよ」

ギルは笑って、メーシーの入れたお茶をすすった。

「わあ、美味しいな、このお茶」

「ありがとう。お代わりは何杯でも出来るから、ゆっくりしていつてね」

メーシーはお茶の入ったボトルを置くと、居間を出ていった。

「でも、これからはコルバ爺さんも時々は竜に乗らなきゃいけないね。1人でも大丈夫？」

「バカにするでない！ワシは何十年も竜に乗ってきたのじゃぞ。まだまだ現役じゃ」

「そうかな？なんか心配だよ。セレム、コルバ爺さんのこと頼んだよ」

「え？……」

状況の見えないセレムは、きょとした顔をする。

「ああ、そうか。セレムはまだ知らないんだよね、シンとレナと僕がアリシアの住む南の国に行くってこと」

「南の国に？……みんな行ってしまふの？」

これから竜使いとして、竜の谷の皆と楽しく過ごそうと思っていたセレムには衝撃的な出来事だった。

「もっと早く言えば良かったね。アリシアが来た時から分かったんだけど」

「……」

「セレムや、心配するでない。ワシは竜の谷に残るからな。もうこの年じゃ先は見えとるわ。ワシは竜の谷に骨を埋めたいんじゃないよ。」

南の国は竜達の樂園かもしれないが、ワシは生まれ育った竜の谷を離れる訳にはいかん」

コルバは、目を伏せるセレムに言った。

「セレムにも、まだまだ教えることは山とあるわ」

「フェアリが大きくなるまでは、僕のルピイを残して行くよ。ルピイでここと竜の谷を行き来すれば良いよ」

ギルは微笑むと、袋の中から何かを取りだし、セレムの前のテーブルに置いた。

「これは……」

「ギル手作りの角笛だよ。竜使いの必需品だからね、セLEMも持ってなきゃダメさ」

セLEMは木彫りの角笛を手にとった。

「ありがと。大切にするよ……南の国にはいつ出発するの？」

「一週間後。初雪が降るまでには立たなきゃね。でも、また帰ってくるから。半年もすればフェアリは大きくなって空を飛べるようになるだろうし、そしたらルピィも南の国に行く」

「南の国が……」

竜達がたくさん住んでいるという南の国。竜達の楽園のようなその国に、いつかセLEMもフェアリと一緒に行ってみたいと思った。

と、セLEMの横で大人しく座っていたフェアリが、突然起きあがるとピョンピョンと跳ねながら玄関の方へ歩いて行った。

「フェアリ？」

フェアリは玄関のドアの前でジャンプしながら、前足でドアを掻いた。

「誰か来たのかな？」

だが、ドアはなかなか開かなかった。フェアリはそわそわしながら羽をパタパタさせて大きくジャンプすると、ドアの取っ手に前足をかけドアを内側に開いた。

「……」

ドアの向こうには、アンナが立っていた。籠を抱え、上目遣いの中に様子を気にしている。

「おや、可愛いお嬢ちゃんじゃ」

「アンナ……」

セLEMと目が合ったアンナは、ためらいがちに目を伏せて立ちつくす。フェアリは跳ねながら、アンナのドレスの裾をくわえて引張った。

「アンナ、入っておいでよ。綺麗な花をありがと」

セLEMはアンナが届けてくれた花を思い出し、笑顔を向けた。ア

ンナに対する怒りは、もうとつくに消えていた。

「足はもう治ったのかい？」

「……私の足の怪我なんて、たいしたことないわよ……」

アンナは手にした籠におでこをつけて口ごもり、シクシクと泣き出した。セレムの優しい言葉は、アンナを余計に悲しくさせた。

「もしあのままセレムが戻って来なかったら……私も生きていけなかった。死んじゃおうって思った……」

「アンナちゃんや、命を粗末にしちゃいかな。セレムはこうして戻って来たんじゃない。もう大丈夫じゃぞ」

コルバは愛おしそうに目を細めながら、ほおっほおっと笑った。

「ねえ、その籠の中に何か入ってるの？さっきから良い香りがする。フェアリもすごく気になってるみたいだよ」

ギルは、フェアリがアンナの籠めがけて跳ねるのを見て言った。

アンナは顔を上げると、涙を拭った。

「私が焼いたケーキよ。フェアリにもあげるわ。みんなで食べましょう」

アンナはフェアリに引つ張られながら、家の中に入って行った。

美味しいお茶とアンナお手製のケーキで、皆は楽しいひとときを過ごした。帰り際コルバは、セレムに怪我に効く薬草をたくさん渡した。

「薬草のことも、これから色々教えてやるわい」

「コルバ爺さんの薬草学はなかなか勉強になるからね。僕も薬草に詳しくなったんだ」

「この薬草を傷口に塗ったり、煎じて飲んだりすれば、怪我などたちどころに治ってしまうぞ」

「ありがとうございます」

セレムは感謝しながら、たくさんの薬草を受け取った。

「アンナ、あのケーキすごく美味しかった。作り方教えてよ」

ギルはアンナに言った。

「ダメ！あれは私だけの秘密のケーキだもん、誰にも教えないわ」
「えー残念だなあ。僕が作るケーキに負けなくらい美味しかったのに」

「あら、あんたのケーキより私のケーキの方がずっと美味しいわよ」
アンナは頬を膨らませると、ツンとすましてギルから顔をそむける。泣いていたアンナは、すっかり元気になっていた。

「怒ってるアンナの方が、ずっとアンナらしいね」

ギルは笑いながら、そっとセレムに耳打ちした。セレムはクスツと笑い、頷く。

後、一週間。ちょうどセレムの傷が治る頃、竜の谷の皆は南の国に去って行く。空を飛んでいく竜の姿を見つめながら、セレムは少し寂しい気持ちになった。

和解（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回が今までで最高の長さとなりました。（^^^;）お話もいよいよ後一回で終わります。^{エピソード}気を引き締めて頑張ります！

旅立つ日

村の教会前の広場は、四匹の竜達の到着で朝から賑わっていた。あれから一週間が過ぎ、セレムの足の怪我也治った頃、旅立ちの日を訪れた。

皆が南の国に行ってしまう前に、セレムの村に集っていた。あの日、初めてレナとギルに会った時のように、竜の谷に住む人々とアリシアは、村人達に珍しい収穫物を売っていた。

セレムはフェアリを連れて、アンナと一緒にやって来たが、刻々と迫る別れの時を思うと、市場のような賑わいがかえって悲しく目に映った。

「セレム」

村人達が集まっている場所から少し距離をおいて佇んでいたセレムは、ふと声をかけられた。振り向くと、アリシアが笑顔で近づいて来た。アリシアとは、竜の谷の森で衝撃的な場面に遭遇して以来会っていないかった。

「……」

あの時のことを思い出すと、セレムの頬がパツと染まった。あれから、アリシアの存在は遠いものとなってしまったけれど、今でもアリシアの金色の髪は輝き、その笑顔は眩しく感じられる。

「元氣そうで良かったわ。セレムとはもつとゆっくり過ごしたかったんだけど、もうそろそろ帰らないと冬になってしまっわ。私が住んでいる国は、一年中温かいから過ごしやすいのよ。セレムもいつか遊びに来てね」

「……」

「どうかした？」

目を伏せて黙っているセレムにアリシアは聞く。

「うっん、何でもない。フェアリが大きくなって空を飛べるようになったら、僕もきつと行くよ」

セレムは首を振って顔を上げた。

「そう。楽しみにしているわ」

アリシアはセレムを見つめて微笑んだ。

「アリシア……」

アリシアの視線を感じながら、セレムはふと、アリシアは自分を通してラルフのことを見ているんじゃないかという気がした。アリシアの心の中には、ずっと13才のラルフが生き続けている。ラルフと同じ年になり容姿も似ているセレムは、アリシアが幼い頃に慕っていたラルフ自身なのだと。

「僕……森でラルフに会ったよ」

セレムはアリシアを見返しながら、静かに言った。

「え？……」

アリシアは驚いて息を呑む。

「森で怪我をした時、ラルフに助けられたんだ。ラルフはコーリーと一緒にだった。夢の中で会っただけかもしれないけど……僕は確かにラルフとコーリーの姿を感じたよ。あの森でラルフとコーリーは生き続け、僕達を見守ってくれてるような気がする」

「ラルフが……」

アリシアはセレムから視線を外し、口をつぐんだ。その瞳はみるみる潤んでいく。「アリシアは、今でもラルフのことが大好きなんだよね。きつと、僕や父さんや母さんが、ラルフのことを思う気持ちと同じくらいに……」

アリシアの瞳からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ええ、大好きよ」

アリシアは涙を拭おうともせず、微笑んだ。

「ラルフもアリシアのこと好きだよ。アリシアのこともきつと守ってくれる」

「……」

アリシアは言葉にならず、微笑みながら首を縦に振った。

「え？アリシア泣いてるの？半年後にはまた戻ってくるんだから、そんなに悲しくはないよ」

商売を終えたギルは、アリシアが泣いているのを見て驚いた。シンとレナ、コルバとアンナも後に続き、フェアリもピョンピョン跳ねながらやって来た。

「そうじゃないのよ……」

アリシアはハンカチで涙を拭くと、にっこりと笑った。

「嬉しくて泣いてるの。セLEMはいつの間にか随分大人っぽくなったと思うて」

「そうかな？僕達出会ってまだほんの数ヶ月だよ。何にも変わってないと思うけど」

ギルは目を丸くして、まじまじとセLEMを見た。

「ギル、籠を片づけて」

レナはギルの手を引っ張った。

「ほおっほおっ、ワシは確かに聞いたぞ。2人が『大好き』と言い合っておるのをな」

コルバは愉快そうに笑った。アンナはサツと前に出ると、セLEMの腕を組みアリシアを睨んだ。

「セLEMはそんなこと言わないわ」

「フツ、心配しなくても、アリシアにはシンっていう恋人がいるんだから」

レナはチラツとシンを見ながら口元を弛めた。

「へえ？そうなの？2人は恋人？」

ギルが一層目を丸くすると、シンとアリシアは微笑みながら見つめ合った。

「爺さん、話をややこしくするなよ。耳も遠くなってきたのか？」

シンは少し照れながら言った。

「何を言うか、まだ耳はよく聞こえるわい。何、まだ結婚をしているわけでもなからう。この先どうなるかはわからんぞ。いや、結婚したからと言うても、恋愛は自由じゃからな」

コルバは声を立てて笑った。

「年の差なんぞも気にならんわ。ワシはまだアリシアを諦めてはおらんぞ」

「ったく、コルバ爺さんにはかなわないよ」

皆が笑う。セレムも微笑んだ。コルバ爺さんにかかれば、どんな真剣な悩みごとでも明るく消し去ってしまいそうだ。

後かたづけが終わった後、いよいよ別れの時がきた。半年後には戻ってくると言っても、やはり寂しい気持ちになる。

「セレム、ルピイを頼んだよ。ルピイは寂しがりで撫でられるのが好きだから、毎晩寝る前には抱きしめて撫でてあげてね」

ギルはしっかりとルピイの首を抱きしめた後、セレムに念を押した。ルピイは喉をゴロゴロ鳴らしている。

「うん、わかった」

ギルは名残惜しそうにルピイの首から手を放すと、その首にキスして走り去り、レピイの背に乗った。既にレナは先に乗っていた。シンもアリシアもそれぞれの竜に乗っている。

「さあ、そろそろ出発しようか」

シンが声をかけると、竜のハーンはいなないて羽を広げた。四匹の竜が勢揃いする姿は勇ましいが、特に一番大きなハーンの姿は迫力があつた。フェアリは、ハーンの真似をして小さな羽をパタパタさせた。その様子を見て、アリシアは顔をほころばせた。

「半年後、大きくなったフェアリの姿を楽しみにしているわ。でも、フェアリにはこのままの可愛い姿でいて欲しい気もするわね」

セレムは落ち着きのないフェアリを抱き上げた。

「フェアリの背に僕が乗るなんて、今は信じられないよ」

「フフ、あつという間に大きくなるわよ」

アリシアは真剣な眼差しをセレムに向ける。

「セレム、あなたはラルフより成長して、ラルフの分まで生きてね」

「……」

セラムは黙って頷いた。

そして、次々と竜達は空へ舞い上がり、レナとギルの乗ったレピイも空へ羽ばたこうとした。

「レナ！」

セラムは慌ててフェアリを放すと、レピイの元に駆け寄った。

「何？」

セラムはポケットの中から小さな花束を取り出すと、レナに差し出した。

「これ、持って行って」

「……何さ、これ。萎れかけてるよ」

「あ、ごめん。今朝摘んだんだけど、ずっとポケットに入れてたから……」

セラムは手にした花に目を落とす。確かに幾分萎れて元気がなかった。

「大丈夫だよ。水筒の水の中に入れておけば、すぐに元気になるよ。貸して」

レナの後ろからギルが言う。

「いいよ。あたしがやるから」

レナはギルの手を押しやった。

「ありがと……」

レナはボソツと言うと、笑みを浮かべた。

「じゃあね、セラム！」

ギルがセラムに手を振り、レピイも空へと舞い上がって行った。

竜達はしばらくグルグルとセラム達の上空を旋回する。

「レナ！今度あんたにも花飾りを作ってあげるわ！あんたも花に興味があるなら！」

突然アンナは、空の上を見上げながら叫んだ。レナはレピイから身を乗り出して、アンナに手を振った。

セラムとアンナとコルバに見送られながら、やがて竜達はゆっくりと空高く舞い上がり、南の空へと旅立って行った。

「さて、今夜は泊めて貰えるかの、セLEM？」

竜達の姿が見えなくなった後、コルバが口を開いた。

「母君の手料理を頂くとしようか」

「はい。母さんもいつでも来て下さいって言っていました」

「それは良かった。アンナちゃんや、そろそろ帰るかの」

ルピィの側に佇み、首を撫でているアンナに向かってコルバが言った。竜嫌いのアンナがルピィを撫でていることを、セLEMは意外に思う。

「……お爺さん、その竜の谷っていう所に行つて、時々はあたしが料理を作つてあげるわ」

アンナはコルバに目をやった。

「おや、アンナちゃんがワシのここに来てくれるのかね？」

コルバは顔をほころばせる。

「ええ……もうすぐしたら父さんが家に帰つて来るの。そしたら、あたしも仕事をしなくてよくなるから」

「アンナ、竜に乗るの大丈夫？」

セLEMには、竜に乗つて空を飛ぶアンナの姿は想像できない。

「……高い所は好きじゃないけど……竜もよく見たら、なかなか可愛いわ」

アンナは、ルピィの大きな瞳を見つめる。ルピィはその瞳をパチパチと瞬かせた。

「それに、セLEMと一緒に恐くないわ」

「ほおっほおっ、セLEMは女性に人気があるんじゃない」

コルバはセLEMを冷やかに、セLEMはうつむいた。

「……」

「じゃが、女性皆に優しく過ぎると、苦労すること多いぞ」

コルバは愉快そうに笑いながら、先を歩いて行く。

「ねえ、何でレナに花束を渡したの？」

アンナは上目遣いにセLEMを見る。

「あれは……」

「花束なら私を用意してあげたのに」

セレムは首を振った。

「僕が摘んだ花束じゃなきゃダメなんだ。もう、帰ろう」

セレムはフェアリをルピイの背に乗せた。

「ルピイ、ついておいで」

セレムが歩く後ろから、ルピイは低く飛んでついて来る。

「待って、セレム。どうしてセレムの摘んだ花じゃなきゃダメなの？」

アンナはセレムの後を追いかけて、しつこく質問する。

「えーと、何でも……」

セレムはアンナをかわし、足を速めてコルバの後に続いた。その後ろからは、アンナの声が響く。フェアリは楽しげに鳴きながら、ルピイの背に揺られてその様子を見下ろす。小さな羽を広げたフェアリは、もう空を飛んでいる気分になっていた。

旅立つ日（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回、書きたいことを全部書き綴っていったら、ものすごく長くなってしまう……（^^;）いよいよ後はエピソードのみです。嬉しいような名残惜しいような気持ちです。後少しだけお付き合い下さいね。

エピローグ

草原を吹き抜ける風は、柔らかな草花の香りを運んでくる。穏やかな春の日差しの中に、全ての景色は優しく包まれている。

なだらかな丘の上にあるラルフの墓の前に、セレムは佇んでいた。セレムの隣りにはフェアリがじっと座っている。もう小さなフェアリではない。真っ白な体と丸い目は変わっていないが、今ではルピイよりも大きな竜に成長していた。

あれから半年が過ぎ、季節は春に変わっていた。数週間前、シンとアリシアとレナとギルが、竜の谷に帰ってきた。嬉しい再会。楽しい日々。そして今日、シンとアリシアはまた南の国に戻っていく。「兄さん、フェアリと一緒に南の国に行つて来るよ」

セレムは、持ってきた花束をラルフの墓に供えた。横のフェアリは顔を上げていなく。フェアリの背にはセレムの荷物が乗せてある。レナとギルが竜の谷に残ってコルバとゆっくり過ごしている間、セレムはシンとアリシアと共に南の国に行くことに決めた。遠い南の国へは長い旅になるが、フェアリには長旅に耐えられるだけの体力がついている。フェアリは、子供の頃のまま元気でやんちゃに育っていた。

フェアリの成長にはかなわないが、セレムも半年前に比べると身長も伸びて日に日に大人に近づいている。今に、ラルフのことを「兄さん」と呼ぶのが変に思えてくることだろう。

やがて、春の霞んだ空の上に二匹の竜の姿が見えてきた。シンとアリシアは、南の国に帰る途中にセレムの村に立ち寄る予定だった。その姿を確認すると、セレムはフェアリの背に乗った。

「フェアリ、行くよ」

フェアリは大きくいらないで、羽を羽ばたかせ、ゆっくりと上空に舞い上がって行った。だんだんとラルフの墓が小さくなっていく。春の風に乗る、セレムは更に高度を上げていった。

「あ……」

森の上空に近づいた時、セレムは光るものを目にした。鳥のように、森の上を飛びまわっている。いつか、レナが森で目にしたというあの光りだろうか？

「ラルフ？……」

一瞬だけ、セレムの目にはラルフとコーリーの姿に見えた。そして、それは森の中へとスッと消えていった。

「ありがとう、ラルフ」

ラルフとコーリーは、セレムを見送ってくれたのだろうか？光りが消えた森を見つめ、セレムは微笑んだ。そして、空へと羽ばたいて行った。

季節がめぐり、遙かな時が過ぎゆき、竜の姿がこの世から消えていった後も、竜の谷のことは語り継がれ、人々の記憶に残っていた。

セレムの竜フェアリは、随分と長生きをして、セレムの子孫の代まで村と竜の谷を守り続けた。そして、村の森はいつしかラルフの森と呼ばれるようになった。深く険しい森で、道に迷いそうになった人の中には、竜に乗った少年の姿を目撃する者がいるという。そして、その姿を目にすれば、必ず森を抜けることが出来る。

ラルフとコーリーの守る森では、人々が迷うことは決してなかった。

完

エピローグ（後書き）

最後まで読んで下さって、ありがとうございました！ついに完結することが出来ました！

この物語で一番書きたかったことは、セレムの心の成長です。だんだんと大人に近づいてゆくセレムを描きたかったんですが、上手く伝わったでしょうか？（^^;）その後のセレムがどうなったか？誰と結ばれたか？は、私自身も分かりません。読者の方々の想像を大切にしたいので、お任せいたします。

長い間お付き合いありがとうございました。これからも、短編、長編と書いていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1388a/>

竜の住む谷間

2010年10月8日13時36分発行